

科目名	音楽科指導法 I	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				
授業目的と到達目標					
【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する ・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る ・学習指導案やレポートの作成を通して教員に求められる資質能力の向上を図る【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する					
授業概要					
[対面授業] ・学習指導要領の理解 ・学習指導案の作成 ・実技指導法「歌唱・器楽」の習得					
受講上の注意					
・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する ・A 表現:歌唱は共通教材等のピアノ伴奏および模唱を習得する ・A 表現:器楽は模範演奏技能を習得する					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
指導案・レポート等			40		
実技テスト			30		
平常点			30		
教科書情報					
教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編				
出版社名		著者名	文部科学省		
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽				
出版社名		著者名	教育出版		
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽				
出版社名		著者名	教育芸術社		
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
中学校校長			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	学習指導要領解説 音楽編の理解①		
2	学習指導要領解説 音楽編の理解②		
3	学習指導要領解説 音楽編の理解③		
4	学習指導要領解説 音楽編の理解④		
5	A表現 歌唱指導の習得①		
6	A表現 歌唱指導の習得②		
7	学習指導要領 音楽編の理解(「共通事項」について)		
8	学習指導計画の理解①(授業づくりについて)		
9	学習指導計画の理解②(授業づくりについて)		
10	学習指導案の作成演習「歌唱」①(題材の設定)		
11	学習指導案の作成演習「歌唱」②(指導の流れ・「めあて」について)		
12	学習指導案の作成演習「歌唱」③(「導入・展開・振り返り」時間配分等について)		

13	学習指導要領音楽編の理解(「共通事項」小中学校の連携について)
14	A表現 歌唱指導の習得
15	A表現 器楽指導の習得

科目名	音楽科指導法 I	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				
授業目的と到達目標					
【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する ・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る ・学習指導案やレポートの作成を通して教員に求められる資質能力の向上を図る【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する					
授業概要					
[対面授業] ・学習指導要領の理解 ・学習指導案の作成 ・実技指導法「歌唱・器楽」の習得					
受講上の注意					
・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する ・A 表現:歌唱は共通教材等のピアノ伴奏および模唱を習得する ・A 表現:器楽は模範演奏技能を習得する					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
指導案・レポート等			40		
実技テスト			30		
平常点			30		
教科書情報					
教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編				
出版社名		著者名	文部科学省		
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽				
出版社名		著者名	教育出版		
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽				
出版社名		著者名	教育芸術社		
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
中学校校長			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	学習指導要領解説 音楽編の理解①		
2	学習指導要領解説 音楽編の理解②		
3	学習指導要領解説 音楽編の理解③		
4	学習指導要領解説 音楽編の理解④		
5	A表現 歌唱指導の習得①		
6	A表現 歌唱指導の習得②		
7	学習指導要領 音楽編の理解(「共通事項」について)		
8	学習指導計画の理解①(授業づくりについて)		
9	学習指導計画の理解②(授業づくりについて)		
10	学習指導案の作成演習「歌唱」①(題材の設定)		
11	学習指導案の作成演習「歌唱」②(指導の流れ・「めあて」について)		
12	学習指導案の作成演習「歌唱」③(「導入・展開・振り返り」時間配分等について)		

13	学習指導要領音楽編の理解(「共通事項」小中学校の連携について)
14	A表現 歌唱指導の習得
15	A表現 器楽指導の習得

科目名	音楽科指導法Ⅱ	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 後期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標

【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る・学習指導案作成等を通して教員に求められる資質能力の向上を図る
 【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する

授業概要

[対面授業]・学習指導要領の理解・学習指導案の作成・「主体的・対話的で深い学び」の実践・実技指導法の充実・評価についての理解・授業内容の理解と定着は確認テストで行う

受講上の注意

・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する・A 表現:歌唱は共通教材のピアノ伴奏および模唱を習得する

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
指導案・レポート等	20
実技テスト・模擬授業等	30
確認テスト	20
平常点	30

教科書情報

教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
中学校校長			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	評価について①(目標に準拠した評価)		
2	評価について②(観点別評価)		
3	評価について③(評価方法実践演習)		
4	歌唱指導法について(模範演奏確認テスト①)		
5	学習指導案の作成演習「鑑賞」①(題材の設定)		
6	学習指導案の作成演習「鑑賞」②(指導内容の確認)		
7	学習指導案の作成演習「鑑賞」③(「めあて・展開・振り返り」について)		
8	和楽器の指導について①		
9	和楽器の指導について②(実践事例作成)		
10	創作領域の指導法について(具体例による実践演習)		

11	確認テスト
12	主体的・対話的で深い学びの実践について(表現領域:歌唱)
13	主体的・対話的で深い学びの実践について(表現領域:器楽)
14	主体的・対話的で深い学びの実践について(鑑賞領域)
15	音楽科指導法Ⅰの総括

科目名	音楽科指導法Ⅱ	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 後期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標

【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る・学習指導案作成等を通して教員に求められる資質能力の向上を図る
 【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する

授業概要

[対面授業]・学習指導要領の理解・学習指導案の作成・「主体的・対話的で深い学び」の実践・実技指導法の充実・評価についての理解・授業内容の理解と定着は確認テストで行う

受講上の注意

・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する・A 表現:歌唱は共通教材のピアノ伴奏および模唱を習得する

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
指導案・レポート等	20
実技テスト・模擬授業等	30
確認テスト	20
平常点	30

教科書情報

教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
中学校校長			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	評価について①(目標に準拠した評価)		
2	評価について②(観点別評価)		
3	評価について③(評価方法実践演習)		
4	歌唱指導法について(模範演奏確認テスト①)		
5	学習指導案の作成演習「鑑賞」①(題材の設定)		
6	学習指導案の作成演習「鑑賞」②(指導内容の確認)		
7	学習指導案の作成演習「鑑賞」③(「めあて・展開・振り返り」について)		
8	和楽器の指導について①		
9	和楽器の指導について②(実践事例作成)		
10	創作領域の指導法について(具体例による実践演習)		

11	確認テスト
12	主体的・対話的で深い学びの実践について(表現領域:歌唱)
13	主体的・対話的で深い学びの実践について(表現領域:器楽)
14	主体的・対話的で深い学びの実践について(鑑賞領域)
15	音楽科指導法Ⅰの総括

科目名	音楽科指導法Ⅲ	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標

本授業は、「教師が何を教えるか」という考え方のみならず、「子どもたちにどのように学んでもらうか」「子どもたちに獲得させたい資質・能力をどう育むか」といった、各自の授業デザインを、「学習指導要領」に則った、具体的な授業構成ができる技能を学びます。|また、音楽科授業を通しての、子ども達の様々な「なぜ」と向き合い考えることで、「感性」を大切にした「人間力」を育む音楽科指導法を学びます。|■授業目的は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱの授業内容を踏まえ、生徒の活動目標を「3観点」(基礎的な知識及び技能、思考力判断力表現力等、主体的に学習に取り組む態度)で決め、指導者の評価の物差しとなる「評価規準」を表裏一体化し、生徒全員が「概ね B」がとれるよう設定するとともに、指導事項と[共通事項]を授業構成の支えとしつつ、「学習指導案&ワークシート」作成のための「授業構想チェックシート」の見方・考え方を身につけます。|■到達目標は、教育実習に向けた授業デザイン案を、学習指導要領(音楽)に則った「指導事項」「共通事項」「評価規準」を支えとして「授業構想チェックシート」(学習指導案&ワークシート)に取りまとめ、設計できることを目標とします。|

授業概要

[対面授業]|■講義は、検定教科書から、①「2 領域・4 分野」の具体的な授業教材を選択し、②指導事項、[共通事項]に即した学ばせたい音楽的事項を決め、③音楽的な見方・考え方を働かせ、④「主体的・対話的で深い学び」による学習形態を追求します。|■特に、小・中、2 社の検定教科書を、小中 9 年間の学びの連続性と系統性から見取り、「教科書採択演習」として比較検討を研究します。|■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」で見取ります。|

受講上の注意

■ワークシート作成や、模範演奏のための教材提示力の事前スキルとして、Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等の PC 活用環境を整えておいてください。|■検定教科書(2 社)に掲載されている教材について、各社毎の掲載内容の特徴を比較・検討し、授業構想を研究しておいて下さい。|■A 表現(1)の歌唱共通教材(7 曲)からは、学内で実施された弾き歌い歌唱曲(2 曲)以外の 5 曲についても、模範唱(簡易伴奏可)ができるように事前練習をしておいて下さい。|

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
■毎回の授業内「KIZUKI 課題」の提出と演習試験	40

■課題教材に対する授業デザイン力(授業構成チェックシートの作成)	40
■主体的な取り組み姿勢	20

教科書情報

教科書1	■『中学校学習指導要領解説 - 音楽編』(平成 29 年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)
教科書2	■中学生の音楽 1、2・3 上下、中学生の器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの 1、2・3 上下、中学器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	

参考書情報

参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料		
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名	(著)文部科学省国立教育政策研究所/令和 2 年度版
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

■特に授業では、教育現場の GIGA スクール構想(1 人一台タブレット)の進展に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等)を必要とします。ハード的な部分も含め、ICT 環境整備に積極的に努めて下さい。|■また授業では、①検定教科書(2 社 8

冊)、②学習指導要領、③PCを常に持参活用しながらの参加を推奨します。|■尚、A表現(1)歌唱の共通教材5曲とは、「赤とんぼ」「花」「荒城の月」「早春賦」「花の街」を |

教員実務経験

中学校校長、大阪府中学校音楽教育研究会会長、近畿音楽教育連合会代表理事、日本吹奏楽指導者協会会員、元教育委員会総括指導主事等 |

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	1.【音楽科における”学びの本質”と”意義”】 ・「音楽科で育む”感性”とは」 ・「なぜ学校の授業で音楽科を学ぶのか”音楽科の授業を学ぶ意義”」
2	2.【これまでの「学習指導要領」の成果と課題】 ・「音楽科の2領域・4分野の定着の成果の課題」 ・「共通事項」を支えとした知覚・感受の感受性の育成
3	3.【新学習指導要領改訂の背景と基本的な考え方】 ・「新学習指導要領の内容構成の改善と考え方」 ・「小・中・高の概要と構成の比較を通して」
4	4.【新学習指導要領改訂の主要なポイント】 ・ 一体的な「主体的・対話的で深い学び」とは何か ・音楽科における「見方・考え方」とは何か
5	5.【題材構成を要とした”学習指導案”の作成】 ・学ばせたい音楽的事項を”題材名”にする重要性とは ・学ばせたい音楽的事項が適切に指導計画されているか
6	6.【音楽科で育成される3つの資質・能力】 ・「知識及び技能」の習得 ・「思考力、判断力、表現力等」の育成 ・「学びに向かう力、人間性等」の涵養
7	7.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方①】 ・「概ね満足Bと判断する”評価規準”を大切に」する視点 ・「概ね満足Bと判断する”評価規準”と”評価基準”との関係」
8	8.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方②】 ・「指導計画」と「評価計画」を表裏一体にする意味 ・「評価から評定」の関係と「指導と評価の一体化」
9	9.【小中校種間の連携と音楽科の学力】① 【授業内 Group 演習】 ・小中学校 “検定教科書”から観る音楽の力 ・「教科書採択」演習
10	10.【小中校種間の連携と音楽科の学力】② 【授業内 Group 演習】 ・指導事項及び「共通事項」からの系統性 ・小中・世代を繋ぐ「日本の四季の歌」の魅力
11	11.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】① 【授業内 Group 演習】 ・「A表現(1) 歌唱分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ
12	12.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】② 【授業内 Group 演習】 ・「A表現(2) 器楽分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ

13	13.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】③ 【授業内 Group 演習】 ・「A 表現(3) 創作分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方捉え方のコツ
14	14.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】④ 【授業内 Group 演習】 ・「鑑賞領域 B 鑑賞分野」指導事項ア、イの捉え方捉え方のコツ
15	15.【講義のまとめと総括】 ・音楽科指導法Ⅳ、直前の教育実習に向けた授業計画の準備

科目名	音楽科指導法Ⅲ	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標

本授業は、「教師が何を教えるか」という考え方のみならず、「子どもたちにどのように学んでもらうか」「子どもたちに獲得させたい資質・能力をどう育むか」といった、各自の授業デザインを、「学習指導要領」に則った、具体的な授業構成ができる技能を学びます。|また、音楽科授業を通しての、子ども達の様々な「なぜ」と向き合い考えることで、「感性」を大切にした「人間力」を育む音楽科指導法を学びます。|■授業目的は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱの授業内容を踏まえ、生徒の活動目標を「3観点」（基礎的な知識及び技能、思考力判断力表現力等、主体的に学習に取り組む態度）で決め、指導者の評価の物差しとなる「評価規準」を表裏一体化し、生徒全員が「概ね B」がとれるよう設定するとともに、指導事項と〔共通事項〕を授業構成の支えとしつつ、「学習指導案&ワークシート」作成のための「授業構想チェックシート」の見方・考え方を身につけます。|■到達目標は、教育実習に向けた授業デザイン案を、学習指導要領(音楽)に則った「指導事項」「共通事項」「評価規準」を支えとして「授業構想チェックシート」(学習指導案&ワークシート)に取りまとめ、設計できることを目標とします。

授業概要

■講義は、検定教科書から、①「2 領域・4 分野」の具体的な授業教材を選択し、②指導事項、〔共通事項〕に即した学ばせたい音楽の事項を決め、③音楽的な見方・考え方を働かせ、④「主体的・対話的で深い学び」による学習形態を追求します。|■特に、小・中、2 社の検定教科書を、小中 9 年間の学びの連続性と系統性から見取り、「教科書採択演習」として比較検討を研究します。|■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」で見取ります。

受講上の注意

■ワークシート作成や、模範演奏のための教材提示力の事前スキルとして、Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等の PC 活用環境を整えておいてください。|■検定教科書(2 社)に掲載されている教材について、各社毎の掲載内容の特徴を比較・検討し、授業構想を研究しておいて下さい。|■A 表現(1)の歌唱共通教材(7 曲)からは、学内で実施された弾き歌い歌唱曲(2 曲)以外の 5 曲についても、模範唱(簡易伴奏可)ができるように事前練習をしておいて下さい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
■ 毎回の授業内「KIZUKI 課題」の提出と演習試験	40

■課題教材に対する授業デザイン力(授業構成チェックシートの作成)		40
■主体的な取り組み姿勢		20
教科書情報		
教科書1	■『中学校学習指導要領解説 - 音楽編』(平成 29 年告示版)	
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名 (著)文部科学省(2018)
教科書2	■中学生の音楽 1、2・3 上下、中学生の器楽(令和 3 年度版)	
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの 1、2・3 上下、中学器楽(令和 3 年度版)	
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名
参考書情報		
参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料	
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名 (著)文部科学省国立教育政策研究所/令和 2 年度版
参考書名2		
出版社名		著者名
参考書名3		
出版社名		著者名
参考書名4		
出版社名		著者名
参考書名5		
出版社名		著者名
参考 URL		
特記事項		
■特に授業では、教育現場の GIGA スクール構想(1 人一台タブレット)の進展に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等)を必要とします。ハード的な部分も含め、ICT 環境整備に積極的に努めて下さい。 ■また授業では、①検定教科書(2 社 8		

冊)、②学習指導要領、③PCを常に持参活用しながらの参加を推奨します。|■尚、A表現(1)歌唱の共通教材5曲とは、「赤とんぼ」「花」「荒城の月」「早春賦」「花の街」を |

教員実務経験

中学校校長、大阪府中学校音楽教育研究会会長、近畿音楽教育連合会代表理事、日本吹奏楽指導者協会会員、元教育委員会総括指導主事等 |

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	1.【音楽科における”学びの本質”と”意義”】 ・「音楽科で育む”感性”とは」 ・「なぜ学校の授業で音楽科を学ぶのか”音楽科の授業を学ぶ意義”」
2	2.【これまでの「学習指導要領」の成果と課題】 ・「音楽科の2領域・4分野の定着の成果の課題」 ・[共通事項]を支えとした知覚・感受の感受性の育成
3	3.【新学習指導要領改訂の背景と基本的な考え方】 ・「新学習指導要領の内容構成の改善と考え方」 ・「小・中・高の概要と構成の比較を通して」
4	4.【新学習指導要領改訂の主要なポイント】 ・ 一体的な「主体的・対話的で深い学び」とは何か ・音楽科における「見方・考え方」とは何か
5	5.【題材構成を要とした”学習指導案”の作成】 ・学ばせたい音楽的事項を”題材名”にする重要性とは ・学ばせたい音楽的事項が適切に指導計画されているか
6	6.【音楽科で育成される3つの資質・能力】 ・「知識及び技能」の習得 ・「思考力、判断力、表現力等」の育成 ・「学びに向かう力、人間性等」の涵養
7	7.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方①】 ・「概ね満足Bと判断する”評価規準”を大切に”する視点”」 ・「概ね満足Bと判断する”評価規準”と”評価基準”との関係」
8	8.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方②】 ・「指導計画」と「評価計画」を表裏一体にする意味 ・「評価から評定」の関係と「指導と評価の一体化」
9	9.【小中校種間の連携と音楽科の学力】① 【授業内 Group 演習】 ・小中学校 “検定教科書”から観る音楽の力 ・「教科書採択」演習
10	10.【小中校種間の連携と音楽科の学力】② 【授業内 Group 演習】 ・指導事項及び[共通事項]からの系統性 ・小中・世代を繋ぐ「日本の四季の歌」の魅力
11	11.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】① 【授業内 Group 演習】 ・「A表現(1) 歌唱分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ
12	12.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】② 【授業内 Group 演習】 ・「A表現(2) 器楽分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ

13	13.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】③ 【授業内 Group 演習】 ・「A 表現(3) 創作分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方捉え方のコツ
14	14.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】④ 【授業内 Group 演習】 ・「鑑賞領域 B 鑑賞分野」指導事項ア、イの捉え方捉え方のコツ
15	15.【講義のまとめと総括】 ・音楽科指導法Ⅳ、直前の教育実習に向けた授業計画の準備

科目名	音楽科指導法Ⅳ	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 後期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標

本授業は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの授業内容を踏まえた、教育実習直前の音楽科指導法の総まとめとして、「難しいことをやさしく」「やさしいことを簡単に」「簡単なことを楽しく」をモットーに、履修学生全員参加による2領域・4分野の授業デザイン(学習指導案&ワークシート)による、「2022.版 研究収録冊子」の作成完成をめざします。■授業目的は、教育実習に向けた2領域・4分野の教材研究による実践演習を中心に進め、更なる授業展開の実践力を高めます。■また、全中、近中、府中音楽教育研究会が開催した研究資料をもとに、より深く研究し、教育実習に向けた、より高い授業構想、教材開発力を身につけます。

授業概要

[対面授業]■講義は、①「2領域・4分野」の教材選択力と有効性、②学習指導要領の示す「留意事項」を踏まえた授業構成、③今日的課題を踏まえた授業構成、④「出合授業」の演習等の研究を協働的に進めていきます。■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」で見取ります。

受講上の注意

■日頃より、自らの専門分野を生かした音楽的見地を授業開発に活かせるよう心がけ、研究しておいて下さい。■尚、教育実習における生徒との初めての出会いとなる「オープニング授業(出合授業)」(約5分)の授業構想では、自分の専門性を生かした“音と音楽”を活用した出会い構想を準備しておいて下さい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
■ 毎回の授業内「KIZUKI 課題」の提出と演習試験	40
■「2022.版 研究収録冊子」への合格完成版の入稿	40
■ 主体的な取り組み姿勢	20

教科書情報

教科書1	■『中学校学習指導要領解説 - 音楽編』(平成29年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)

教科書2	■中学生の音楽 1、2・3 上下、中学生の器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの 1、2・3 上下、中学器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	
参考書情報			
参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料		
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名	(著)文部科学省国立教育政策研究所/令和 2 年度版
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
■特に授業では、教育現場の GIGA スクール構想(1 人一台タブレット)の進展に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等)を必要とします。ハード的な部分も含め、ICT 環境整備に積極的に努めて下さい。■また授業では、①検定教科書(2 社 8 冊)、②学習指導要領、③PC を常に持参活用しながらの参加を推奨します。			
教員実務経験			
中学校校長、大阪府中学校音楽教育研究会会長、近畿音楽教育連合会代表理事、日本吹奏楽指導者協会会員、元教育委員会総括指導主事等			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1.【「2022.版 研究収録冊子」の作成に向けて】・「音楽科指導法Ⅳの進め方及びガイダンス」		

2	2.【今日的課題に対応した「音楽科」のあり方】・「今日的課題に向き合う音楽科の役割」
3	3.【音楽科授業の内容として、ふさわしい授業とふさわしくない授業】 【Group 演習】・「歌唱、器楽、創作、鑑賞の学習指導上の意義と留意点をもとにしたふさわしくない授業」の演習。
4	4.【生徒が主体となって学習する音楽科の授業構成】 【Group 演習】・「生徒が主体となる楽しい音楽学習」を実現するため授業工夫
5	5.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】①・「新学習指導要領第 3.1?「障害のある生徒についての、学習活動の指導方法の工夫」他。
6	6.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】②・「新学習指導要領第 3.2?ア「音楽活動を通して、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせ、音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう考慮した学習活動の指導方法の工夫と自然音や環境音などの取り扱い」他。
7	7.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】③・「新学習指導要領第 3.1?「第 1 章総則の第 1 の 2 の?に示す道德教育の目標に基づいた、道德科などとの関連を考慮した学習活動の指導方法の工夫」他。
8	8.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】① 【Group 演習】・概ね「週 1 回の音楽科の授業」による効果的な学習展開をめざした「表現領域と鑑賞領域の連携」を図った学習指導案の作成。
9	9.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】② 【Group 演習】・「日本の音・音楽」を題材とした学習指導案の作成。・「生活や社会の中の音や音楽」を題材とした学習指導案の作成。
10	10.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】③ 【Group 演習】・「小中タテに繋がる学びの連続性」を要とした学習指導案の作成。・「我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わい、愛着をもつことができる」学習指導案の作成。
11	11.【情報機器(D 教科書、タブレット、PP、録音技術等)を活用した教材提示力を生かした授業構成】 ①・PP によるプレゼン、WS 等に楽譜を貼り付ける技能演習 【Group 演習】
12	12.【情報機器(D 教科書、タブレット、PP、録音技術等)を活用した教材提示力を生かした授業構成】 ② ・多重録音等による模範演奏作成の技能演習 【Group 演習】
13	13.【各自の専門性を生かした「音と音楽」を活用した出会い授業】① 【個人演習】・教育実習における生徒との初めての出会いとなる授業
14	14.【各自の専門性を生かした「音と音楽」を活用した出会い授業】② 【個人演習】・教育実習における生徒との初めての出会いとなる授業
15	15.【「難しいことをやさしく」「やさしいことを簡単に」「簡単なことを楽しく」】・2 領域・4 分野の「学習指導案&ワークシート」完全版の検修と提出。・教育実習に向けた授業計画の直前準備

科目名	音楽科指導法Ⅳ	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 後期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名					

授業目的と到達目標

本授業は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの授業内容を踏まえた、教育実習直前の音楽科指導法の総まとめとして、「難しいことをやさしく」「やさしいことを簡単に」「簡単なことを楽しく」をモットーに、履修学生全員参加による2領域・4分野の授業デザイン(学習指導案&ワークシート)による、「2022.版 研究収録冊子」の作成完成をめざします。■授業目的は、教育実習に向けた2領域・4分野の教材研究による実践演習を中心に進め、更なる授業展開の実践力を高めます。■また、全中、近中、府中音楽教育研究会が開催した研究資料をもとに、より深く研究し、教育実習に向けた、より高い授業構想、教材開発力を身につけます。

授業概要

[対面授業]■講義は、①「2領域・4分野」の教材選択力と有効性、②学習指導要領の示す「留意事項」を踏まえた授業構成、③今日的課題を踏まえた授業構成、④「出合授業」の演習等の研究を協働的に進めていきます。■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」で見取ります。

受講上の注意

■日頃より、自らの専門分野を生かした音楽的見地を授業開発に活かせるよう心がけ、研究しておいて下さい。■尚、教育実習における生徒との初めての出会いとなる「オープニング授業(出合授業)」(約5分)の授業構想では、自分の専門性を生かした“音と音楽”を活用した出会い構想を準備しておいて下さい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
■ 毎回の授業内「KIZUKI 課題」の提出と演習試験	40
■ 「2022.版 研究収録冊子」への合格完成版の入稿	40
■ 主体的な取り組み姿勢	20

教科書情報

教科書1	■『中学校学習指導要領解説 - 音楽編』(平成29年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)

教科書2	■中学生の音楽 1、2・3 上下、中学生の器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの 1、2・3 上下、中学器楽(令和 3 年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	
参考書情報			
参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料		
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名	(著)文部科学省国立教育政策研究所/令和 2 年度版
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
■特に授業では、教育現場の GIGA スクール構想(1 人一台タブレット)の進展に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等)を必要とします。ハード的な部分も含め、ICT 環境整備に積極的に努めて下さい。■また授業では、①検定教科書(2 社 8 冊)、②学習指導要領、③PC を常に持参活用しながらの参加を推奨します。			
教員実務経験			
中学校校長、大阪府中学校音楽教育研究会会長、近畿音楽教育連合会代表理事、日本吹奏楽指導者協会会員、元教育委員会総括指導主事等			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1.【「2022.版 研究収録冊子」の作成に向けて】・「音楽科指導法Ⅳの進め方及びガイダンス」		

2	2.【今日的な課題に対応した「音楽科」のあり方】・「今日的課題に向き合う音楽科の役割」
3	3.【音楽科授業の内容として、ふさわしい授業とふさわしくない授業】 【Group 演習】・「歌唱、器楽、創作、鑑賞の学習指導上の意義と留意点をもとにしたふさわしくない授業」の演習。
4	4.【生徒が主体となって学習する音楽科の授業構成】 【Group 演習】・「生徒が主体となる楽しい音楽学習」を実現するため授業工夫
5	5.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】①・「新学習指導要領第 3.1?「障害のある生徒についての、学習活動の指導方法の工夫」他。
6	6.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】②・「新学習指導要領第 3.2?ア「音楽活動を通して、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせ、音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう考慮した学習活動の指導方法の工夫と自然音や環境音などの取り扱い」他。
7	7.【「留意事項」を踏まえた「授業構想」の工夫】③・「新学習指導要領第 3.1?「第 1 章総則の第 1 の 2 の?に示す道德教育の目標に基づいた、道德科などとの関連を考慮した学習活動の指導方法の工夫」他。
8	8.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】① 【Group 演習】・概ね「週 1 回の音楽科の授業」による効果的な学習展開をめざした「表現領域と鑑賞領域の連携」を図った学習指導案の作成。
9	9.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】② 【Group 演習】・「日本の音・音楽」を題材とした学習指導案の作成。・「生活や社会の中の音や音楽」を題材とした学習指導案の作成。
10	10.【今日的課題を踏まえた授業構成の演習】③ 【Group 演習】・「小中タテに繋がる学びの連続性」を要とした学習指導案の作成。・「我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わい、愛着をもつことができる」学習指導案の作成。
11	11.【情報機器(D 教科書、タブレット、PP、録音技術等)を活用した教材提示力を生かした授業構成】 ①・PP によるプレゼン、WS 等に楽譜を貼り付ける技能演習 【Group 演習】
12	12.【情報機器(D 教科書、タブレット、PP、録音技術等)を活用した教材提示力を生かした授業構成】 ② ・多重録音等による模範演奏作成の技能演習 【Group 演習】
13	13.【各自の専門性を生かした「音と音楽」を活用した出会い授業】① 【個人演習】・教育実習における生徒との初めての出会いとなる授業
14	14.【各自の専門性を生かした「音と音楽」を活用した出会い授業】② 【個人演習】・教育実習における生徒との初めての出会いとなる授業
15	15.【「難しいことをやさしく」「やさしいことを簡単に」「簡単なことを楽しく」】・2 領域・4 分野の「学習指導案&ワークシート」完全版の検修と提出。・教育実習に向けた授業計画の直前準備

科目名	音楽とテクノロジー	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 後期	形態	講義		
教員名	志村 哲				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽に関わる様々なテクノロジーの在り方を歴史的作品的分析を通して考察し、芸術とテクノロジーの結合について、将来にわたって考える姿勢を養う。					
授業概要					
本講義の前半は、主に20世紀に発展した科学技術と関わって生み出された新しい楽器と音楽が、現代の私たちに何を示しているかを考察する。後半は、これまで音楽史上ではあまり論じられてこなかったが、今後のテクノロジー発展の方向性を模索するために不可欠な概念としての「音楽文化を支える音の匠」の重要性について論じる。					
受講上の注意					
自己の関わる音楽がどのようにすればさらに向上するかを絶えず考え続けること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業に取り組む姿勢			40		
授業内ミニレポート			20		
最終課題			40		
教科書情報					
教科書1	適宜プリント配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1	『コンピュータと音楽の世界』		
出版社名	東京：共立出版	著者名	志村哲、他（共著）
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
本科目の参考文献の共著者であり、電子音楽・コンピュータ音楽の創作と研究に長年従事してきた。			
授業計画（各回予定）			
授業回	授業内容		
1	オリエンテーション：本講義に関わる創作・学問諸領域の概説と参考文献の紹介		
2	電子楽器の歴史的概観：トラウトニウムからシンセサイザまで		
3	20世紀初頭の電子楽器が示すこと（1）：触れない楽器「テルミン」		
4	20世紀初頭の電子楽器が示すこと（2）：旋律楽器「オンド・マルトノ」		
5	演奏家のいない音楽（1）：電子音楽の定義		
6	演奏家のいない音楽（2）：空間音楽の概念		
7	演奏家のいない音楽（3）：テープ音楽とコンピュータ音楽		
8	再び必要になった演奏家（1）：電子音楽の生演奏		
9	再び必要になった演奏家（2）：ポピュラー音楽におけるテクノロジーの役割		
10	再び必要になった演奏家（3）：新世代楽器とその演奏家		
11	音楽史上の音の匠（1）：音色の秘密は楽器の製作・リペアの行程にある		

12	音楽史上の音の匠(2):記録としての録音と創作としての録音
13	音楽史上の音の匠(3):コンサートの音響技術者は演奏家
14	音楽史上の音の匠(4):映画、ゲーム、インターネット上の音楽
15	音楽とテクノロジーに関わる今後の展望

科目名	楽式論	年次	2	単位数	4
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	講義		
教員名	嶋田 久美				
クラス名	(AD・P・V・PM コース対象)				

授業目的と到達目標

・基本的な楽曲の形式とその構造に関する知識を習得する。|・形式ごとの特色を理解し、自身の演奏や制作活動とのつながりを考え、説明する力を身につける。

授業概要

・授業形態:「対面授業」とする。|・前期:基本的な楽曲の形式とその構造を学ぶ。|・後期:自分が関心のある音楽を取り上げ、その形式(形態)の特徴について考察し、成果をレポートする。

受講上の注意

・毎回の授業で小課題、ないしリアクションペーパーの作成を実施するので、積極的に取り組むこと。|・配布資料と参考書、および自身のノートを活用し、前回までの講義の流れを振り返っておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
試験(前期)	30
小課題(前期)	20
プレゼンテーション(後期)	35
リアクションペーパー(後期)	15

教科書情報

教科書1	適宜、資料配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	新版 楽式論		
出版社名	音楽之友社	著者名	石桁真礼生
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
受講生の関心や理解度に応じて、適宜、進度を調整する。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ガイダンス: 一年の授業計画・成績評価の基準の説明、音楽に関するアンケート		
2	動機、小楽節、大楽節、1 部形式		
3	2 部形式		
4	3 部形式①		
5	3 部形式②		
6	複合 3 部形式①		
7	複合 3 部形式②		
8	ロンド形式①		
9	ロンド形式②		
10	ロンド形式③		
11	ソナタ形式①		

12	ソナタ形式②
13	ソナタ形式③
14	ソナタ形式④
15	前期のまとめ、および試験
16	音楽形式の応用と分析方法についての概説
17	取り上げる音楽の決定、および基本情報の調査方法の説明
18	プレゼンテーション資料作成要領の説明
19	プレゼンテーション①: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
20	プレゼンテーション②: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
21	プレゼンテーション③: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
22	プレゼンテーション④: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
23	プレゼンテーション⑤: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
24	プレゼンテーション⑥: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
25	プレゼンテーション⑦: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
26	プレゼンテーション⑧: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
27	プレゼンテーション⑨: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
28	プレゼンテーション⑩: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
29	プレゼンテーション⑪: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
30	総括

科目名	楽式論	年次	2	単位数	4
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	講義		
教員名	河合 摂子				
クラス名	(W・PM コース対象)				
授業目的と到達目標					
音楽を作ったり演奏するのには、曲の構成の理解が重要である。楽曲の動機、小楽節、大楽節等の基礎知識から、調判定、和音分析、重要な形式の細部の分析までの理解をすることを目標とする。その結果として演奏、指導にいかされるようにすることにつなげたい。					
授業概要					
対面授業 前期は主に楽式の基礎学び、ピアノ作品を通して主な形式を分析をとおして学ぶ。後期はバロック作品、変奏曲等にも触れ、様々な楽器の作品の分析も行い、それをふまえての演奏も行う。					
受講上の注意					
テキストや、配布したプリント、楽譜を必ず持参し、授業内容をノート、楽譜に記入し、それをもとに自分で楽式分析を出来るようにする。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
前期試験			40		
後期試験			40		
授業に取り組む姿勢			20		
教科書情報					
教科書1	和声と楽式のアナリーゼ =バイエルからソナタアルバムまで=				
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡 譲		
教科書2	適宜配る楽譜やプリント				
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1	バイエルピアノ教則本 op.101		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	
参考書名2	ブルグミュラー25 の練習曲		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	
参考書名3	ソナチネアルバム 1		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
演奏するのに大切な形式の授業です、流れをもった授業計画になっていますので、なるべく欠席、遅刻しないでください。出欠も成績に反映します。 後期の作品分析と演奏は特にしっかり取り組んでください。			
教員実務経験			
作曲家			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	一年間の授業計画の説明と、楽式を学ぶための基礎知識の説明 動機、小楽節、大楽節、和音分析等を学ぶ。		
2	2 部、3 部形式の基礎知識の説明① 作品を通しての楽式分析、和声分析		
3	2 部、3 部形式の基礎知識の説明② 前回と違う形式の楽式分析、和声分析		
4	複合 2、3 部形式の基礎知識の説明① 主に 2、3 部形式との違いを通して理解を深める		
5	複合 3 部形式を作品を通して楽式分析をし、和声分析等を学ぶ。 数曲、分析をして、特徴をまとめる		
6	ロンド形式の基礎知識の説明① 楽曲を例に楽式、テーマの展開、和声分析等学ぶ。		
7	ロンド形式の楽式分析② 前回と違う時代の作曲家の作品を通して楽式分析等を学ぶ。		

8	ロンド形式の楽式分析③ 受講生の発表をもとに質疑応答を通して、アドバイス、補足をおこない、ロンド形式をまとめる。
9	ソナタ形式の基礎知識の説明① ロンド形式との違いを説明し、楽式分析をするときのソナタ形式の特徴を学ぶ。
10	ソナタ形式の分析① 前回の基礎知識をもとに、短いソナタ形式を楽式、和声、テーマ等の分析を学ぶ。
11	ソナタ形式の分析② ソナチネ、ソナタアルバム形式のソナタ形式の楽式分析を学ぶ。
12	ソナタ形式の分析③ 有名な古典派の作曲家(ハイドン、モーツァルト、ベートーベン等)のソナタ形式の楽式分析、和声分析等を学ぶ。
13	変奏曲 変奏曲の基礎知識学び、楽式分析を学ぶ。
14	これまでの学んだ楽式を復習、補足をし、試験にむけての分析の仕方を習得する。
15	前期の楽式のまとめと試験
16	前期の復習と、バロック作品の音楽の形式について学ぶ。 対位作品へのアプローチの基礎知識を説明。
17	バロック作品の分析 短い作品を通して対位楽曲の楽式分析、和声分析等の説明
18	バロック作品の組曲の楽式分析① 組曲のそれぞれの作品の楽式分析を説明。 楽式分析を通して組曲の魅力をさぐる。
19	フーガ① フーガの楽式分析の基礎知識を学ぶ。 インベンションの作品を通して楽式分析を説明
20	様々な編成の作品の分析① Duo の作品の分析、旋律楽器、ピアノの役割をふまえて特徴をさぐる
21	弦楽器とピアノの作品の分析 作品を聴いて楽式、和声、アンサンブルの作品の書法を学ぶ
22	管楽器とピアノの作品の分析 作品の楽式、和声、アンサンブルの作品の書法等を学ぶ
23	学生の専攻の楽器の作品を取り上げる。 その作品の楽式、和声等を説明、楽器の特性、楽譜の特性等を学ぶ
24	学生の専攻の楽器の作品を取り上げる。 作品の楽式、和声等を説明し、楽器の特性、作品の特性等を学ぶ
25	弦楽四重奏の作品をとりあげ、弦楽器ならではの作品の特徴や楽器の特性を学び、作品分析を行う
26	歌曲の作品をとりあげ、詞の取り扱い方や詞の世界観をどう音にしているのかを考え、作品分析や和声分析を行い、魅力 に触れる
27	オーケストラ作品を取り上げ、オーケストラの楽器について、楽譜について学び、作品分析を行う。 オーケストレーションの特性から音色や響きの多彩さを学ぶ。

28	ブラスバンドの作品を取り上げ、ブラスバンドの楽器の特性や楽譜について、学び、作品分析を行う。 ブラスバンドの作品の魅力を楽譜を通して学ぶ。
29	近代、現代の作品の楽式の傾向と、楽式の変遷をとおして音楽史の流れ、作曲家の作風へのアプローチをする。
30	一年間の授業のまとめと後期試験

科目名	合唱1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	福井 雅志、永松 圭子、秋本 靖仁、磯本 龍成				
クラス名					

授業目的と到達目標

一つ一つの曲を全員で呼吸を合わせ奏でる事で合唱を理解し豊かな心を育てる。そして12月に開催される特別演奏会を目指すことで心をつにし、今後社会で協調性のある人間の育成を目指す。

授業概要

対面で行う。しかし状況によれば遠隔授業になる場合もある。基本、毎週4人の講師がそれぞれ4部屋に分かれ4パートを指導し練習し、時には全体練習を行う。そして公演前には指揮者とのオーケストラリハーサルを行い本番を目指す。

受講上の注意

12月に行われる「大阪芸術大学特別演奏会」に出演すること。|また上記の特別演奏会の直前の特別練習(指揮者練習・オーケストラ合奏など)に出席すること。|毎週の授業に積極的に受講すること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業への積極的参加度	80
授業態度	20

教科書情報

教科書1	指定の楽譜を授業内で購入		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
実務経験 これまでプロの合唱団に所属し合唱団員として演奏してきた経験や合唱指導者や合唱指揮者としての経験を活かし、合唱することの喜び、魅力を伝える。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ガイダンス(授業での心構え、授業概要) 過去の特別演奏会を鑑賞することもある。 パート分け(ソプラノ・アルト・テノール・バス) 声を出す上での身体の使い方、発声練習(発声については毎回の授業に於いて譜読みと並行して指導する)		
2	特別演奏会に向けての譜読みを開始 パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱①		
3	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱②		
4	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱③		
5	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱④		
6	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱⑤		
7	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱⑥		
8	全体練習①(それぞれのパートの音の重なりを感じる)		
9	全体練習②(それぞれのパートの音の重なりを感じる)		

10	パートに分かれて歌詞による歌唱①
11	パートに分かれて歌詞による歌唱②
12	パートに分かれて歌詞による歌唱③
13	パートに分かれて歌詞による歌唱④
14	パートに分かれて歌詞による歌唱⑤
15	全体練習③(前期のまとめ)
16	パートに分かれて歌詞による歌唱⑥
17	パートに分かれて歌詞による歌唱?
18	パートに分かれて歌詞による歌唱?
19	パートに分かれて歌詞による歌唱⑨
20	パートに分かれて歌詞による歌唱⑩
21	全体練習④(全曲を通して練習)
22	全体練習⑤(全曲を通して練習)
23	パートに分かれて歌詞による歌唱⑪
24	パートに分かれて歌詞による歌唱⑫
25	全体練習⑥(歌い込み)
26	全体練習?(歌い込み)
27	特別演奏会直前の指揮者によるオーケストラ合わせ①
28	特別演奏会直前の指揮者によるオーケストラ合わせ②
29	特別演奏会直前の指揮者によるオーケストラ合わせ③
30	特別演奏会本番

科目名	器楽合奏法	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	西田 和久				
クラス名	AD／P／V コース対象				

授業目的と到達目標

器楽の合奏指導について、楽器演奏に共通する基本的性質の理解を通して、合奏指導に必要な知識を学び、能力を習得する。また、この科目で使われるリコーダーの演奏技術を習得して、教員採用試験に備える。なお、自ら演奏できるだけでなく、指導という視点も併せて身につける。

授業概要

対面授業|アルト・リコーダーの演奏技術を習得する過程で、|楽器演奏の特質を理解させ、合奏への適用を経験することにより|「分業である合奏」の指導方法を身につける。|また、リコーダー・アンサンブルの指揮を経験して、実際に指導を行う。|なお、授業中に課題の演奏を課したり、小テストを行い、|学習状態の把握や修正を行う。

受講上の注意

教職に関係する授業なので、最低限の音楽的基礎知識、及び基礎能力を持って授業に出席してください。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
平常成績(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	30
筆記試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	30
実技試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	40

教科書情報

教科書1	必要な楽譜を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			

出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
パロック式アルト・リコーダーを持参してください。			
教員実務経験			
担当者:テューバ奏者そして在阪の職業演奏団体に演奏。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	授業目的、概要、使用楽器、教材等の説明、アンケートを実施する。		
2	リコーダーの基礎奏法の説明(呼吸、運指、タンギング／作音楽器としてのリコーダー演奏の経験を通して、 管楽器一般に共通する演奏の特徴を学ぶ)、及び受講生の状態を確認する。		
3	器楽指導についての基本理念を口実筆記する。また、以後数週間に亘り、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。まずはハ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。 また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。		
4	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。		

5	教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。
6	器楽演奏の特徴について説明する。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
7	管楽器のアーティキュレーションを学ぶ。演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。また、以後は小テストを随時行い、受講生の習得状態の把握や修正を行う。
8	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。
9	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次に変ロ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
10	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。(難易度を上げる)
11	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
12	今までに学習した音階と分散和音やアーティキュレーションの復習を通して、楽器演奏の特徴についての理解を深める。
13	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にニ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
14	音階と分散和音の復習、実技試験曲の練習、及び前期にて学習した内容を受講生が筆記にてまとめ、提出する。
15	授業のまとめ。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)
16	期末試験(実技)の結果を受けて、前記授業内容の復習、および知識的内容のまとめを受けて、修正及び復習。
17	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
18	合奏の構造と作音楽器のコントロールの関係について学ぶ。

19	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
20	前期から後期にかけて学習した練習曲の中から、指揮の学習に使用するものを選択し、レパートリーを作る。
21	指揮について(指揮者がなすべき内容、技術)説明し、技術的内容を練習する。
22	先立って練習したレパートリーを使い、合奏指導に関するリハーサル・テクニックを学ぶ。
23	合奏指導: 指揮(簡単な曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する)
24	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 1: 以後 4 週間に亘って受講生全員が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
25	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 2: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
26	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 3: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
27	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 4: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
28	器楽指導法について授業を振り返り概観する。及び、期末試験: 筆記(前・後期を通して学んだ知識的な内容を総合した設問に答える)
29	実技内容の復習。及び、期末試験: 実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と 2 重奏)
30	期末試験を受けて、内容の復習及び修正を行う。

科目名	器楽合奏法	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	西田 和久				
クラス名	ME／PM コース 対象				

授業目的と到達目標

器楽の合奏指導について、楽器演奏に共通する基本的性質の理解を通して、合奏指導に必要な知識を学び、能力を習得する。また、この科目で使|用されるリコーダーの演奏技術を習得して、教員採用試験に備える。な|お、自ら演奏できるだけでなく、指導という視点も併せて身につける。

授業概要

対面授業|アルト・リコーダーの演奏技術を習得する過程で、楽器演奏の特質を理解させ、|合奏への適用を経験することにより、「分業である合奏」の指導方法を身につける。|また、リコーダー・アンサンブルの指揮を経験して、実際に指導を行う。|なお、授業中に課題の演奏を課したり、小テストを行い、学習状態の把握や修正を行う。

受講上の注意

教職に関係する授業なので、最低限の音楽的基礎知識、及び基礎能力を|持って授業に出席してください。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	40
筆記試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	30
平常成績(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を 前提とした割合を以下に示す。)	30

教科書情報

教科書1	必要な楽譜を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			

出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
パロック式アルト・リコーダーを持参してください。			
教員実務経験			
担当者:テューバ奏者として在阪の職業演奏団体に演奏。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	授業目的、概要、使用楽器、教材等の説明、アンケートを実施する。		
2	リコーダーの基礎奏法の説明(呼吸、運指、タンギング／作音楽器としてのリコーダー演奏の経験を通して、管楽器一般に共通する演奏の特徴を学ぶ)、及び受講生の状態を確認する。		
3	器楽指導についての基本理念を口実筆記する。また、以後数週間に亘り、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。まずはハ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。		
4	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。		

5	教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。
6	器楽演奏の特徴について説明する。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
7	管楽器のアーティキュレーションを学ぶ。演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。また、以後は小テストを随時行い、受講生の習得状態の把握や修正を行う。
8	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。
9	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次に変ロ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
10	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。(難易度を上げる)
11	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
12	今までに学習した音階と分散和音やアーティキュレーションの復習を通して、楽器演奏の特徴についての理解を深める。
13	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にニ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
14	音階と分散和音の復習、実技試験曲の練習、及び前期にて学習した内容を受講生が筆記にてまとめ、提出する。
15	授業とまとめ。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)
16	期末試験(実技)の結果を受けて、前記授業内容の復習、および知識的内容のまとめを受けて、修正及び復習。
17	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
18	合奏の構造と作音楽器のコントロールの関係について学ぶ。

19	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
20	前期から後期にかけて学習した練習曲の中から、指揮の学習に使用するものを選択し、レパートリーを作る。
21	指揮について(指揮者がなすべき内容、技術)説明し、技術的内容を練習する。
22	先立って練習したレパートリーを使い、合奏指導に関するリハーサル・テクニックを学ぶ。
23	合奏指導: 指揮(簡単な曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する)
24	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 1: 以後 4 週間に亘って受講生全員が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
25	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 2: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
26	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 3: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
27	合奏指導: 指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) # 4: 受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
28	器楽指導法について授業を振り返り概観する。及び、期末試験: 筆記(前・後期を通して学んだ知識的な内容を総合した設問に答える)
29	実技内容を復習する。及び、期末試験: 実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と 2 重奏)
30	期末試験を受けて、内容の復習及び修正を行う。

科目名	基礎作曲法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	橘 由美子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみることで、音楽への理解を一層深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。

受講上の注意

作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨んでください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を向けながら親しんでおいてください。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
教室内添削	20
提出作曲作品(前期)	20
小試験(前期)	20
提出作曲作品(後期)	20
小試験(後期)	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。		
2	和声法演習：非和声音について。		
3	和声法演習：非和声音について(続き)。		
4	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。		
5	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。		
6	和声法演習：ドッペルドミナントについて。		
7	和声法演習：ドッペルドミナントについて。(続き)		
8	和声法演習：副属七を含む課題。		
9	和声法演習：副属七を含む課題。(続き)		
10	作曲演習：ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。		

11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。
23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)
24	和声法演習: 総合復習。
25	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
26	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
27	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
28	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
29	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	基礎作曲法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	河合 摂子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみることで、音楽への理解を一層深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。

受講上の注意

作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨んでください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を向けながら親しんでおいてください。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
教室内添削	20
提出作曲作品(前期)	20
小試験(前期)	20
提出作曲作品(後期)	20
小試験(後期)	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。		
2	和声法演習：非和声音について。		
3	和声法演習：非和声音について(続き)。		
4	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。		
5	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。		
6	和声法演習：ドッペルドミナントについて。		
7	和声法演習：ドッペルドミナントについて。(続き)		
8	和声法演習：副属七を含む課題。		
9	和声法演習：副属七を含む課題。(続き)		
10	作曲演習：ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。		

11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。
23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)
24	和声法演習: 総合復習。
25	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
26	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
27	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
28	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
29	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	基礎作曲法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田中 久美子、下石坂 徹				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。|更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみることで、|音楽への理解を一層深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。|基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作|曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。

受講上の注意

作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨ん|でください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を|向けながら親しんでおいてください。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
提出作曲作品(前期)	20
教室内添削	20
小試験(前期)	20
小試験(後期)	20
提出作曲作品(後期)	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。		
2	和声法演習：非和声音について。		
3	和声法演習：非和声音について(続き)。		
4	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。		
5	作曲演習：ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。		
6	和声法演習：ドッペルドミナントについて。		
7	和声法演習：ドッペルドミナントについて。(続き)		
8	和声法演習：副属七を含む課題。		
9	和声法演習：副属七を含む課題。(続き)		
10	作曲演習：ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。		

11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。
23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)
24	和声法演習: 総合復習。
25	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
26	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
27	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
28	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
29	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	基礎和声法1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	橘 由美子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業内添削	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削		
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削		

13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削
25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使われ方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期試験	40
授業内添削	20
後期試験	40

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削		
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削		

13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削
25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	下石坂 徹、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使われ方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業内添削	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削		
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削		

13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削
25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使われ方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業内添削	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削		
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削		

13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削
25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	中本 芽久美、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業内添削	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削		
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削		
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削		

13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削
25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法1(初級)に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペル・ドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期試験	40
授業内添削	20
後期試験	40

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削		
3	属7和音の連結、課題演習と添削		
4	属7和音の連結、課題演習と添削		
5	属7和音の連結、課題演習と添削		
6	属7和音の連結、課題演習と添削		
7	属7和音の連結、課題演習と添削		
8	属7和音の連結、課題演習と添削		
9	属7和音の連結、課題演習と添削		
10	属7和音の連結、課題演習と添削		
11	属7和音の連結、課題演習と添削		

12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削
23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	河合 摂子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法1（初級）に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペル・ドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（％）
後期試験	40
授業内添削	20
前期試験	40

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削		
3	属7和音の連結、課題演習と添削		
4	属7和音の連結、課題演習と添削		
5	属7和音の連結、課題演習と添削		
6	属7和音の連結、課題演習と添削		
7	属7和音の連結、課題演習と添削		
8	属7和音の連結、課題演習と添削		
9	属7和音の連結、課題演習と添削		
10	属7和音の連結、課題演習と添削		
11	属7和音の連結、課題演習と添削		

12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削
23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	下石坂 徹、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

基礎和声法1（初級）に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。

授業概要

授業は「対面授業」で行います。基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペル・ドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。

受講上の注意

日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業内添削	20

教科書情報

教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削		
3	属7和音の連結、課題演習と添削		
4	属7和音の連結、課題演習と添削		
5	属7和音の連結、課題演習と添削		
6	属7和音の連結、課題演習と添削		
7	属7和音の連結、課題演習と添削		
8	属7和音の連結、課題演習と添削		
9	属7和音の連結、課題演習と添削		
10	属7和音の連結、課題演習と添削		
11	属7和音の連結、課題演習と添削		

12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削
23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	中本 芽久美、田中 久美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
基礎和声法1(初級)に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。					
授業概要					
授業は「対面授業」で行います。基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペル・ドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。					
受講上の注意					
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
後期試験			40		
前期試験			40		
授業内添削			20		
教科書情報					
教科書1	和声 理論と実習 II				
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が作曲家としての経験を生かし指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削		
3	属7和音の連結、課題演習と添削		
4	属7和音の連結、課題演習と添削		
5	属7和音の連結、課題演習と添削		
6	属7和音の連結、課題演習と添削		
7	属7和音の連結、課題演習と添削		
8	属7和音の連結、課題演習と添削		
9	属7和音の連結、課題演習と添削		
10	属7和音の連結、課題演習と添削		
11	属7和音の連結、課題演習と添削		

12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削
23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	鍵盤和声法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	中本 芽久美、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標

鍵盤和声法(キーボードハーモニー)は、ピアノを中心とした鍵盤楽器で右手のメロディーに左手の伴奏をつけるための和声(ハーモニー)と和音(コード)の実用的な音楽的応用の理論と演奏技法の習得の演習です。音楽現場や教育現場で必要に応じてメロディーから充実した音楽に仕上げられるようにします。

授業概要

対面授業|和声法のバス課題をよく理解し、鍵盤上でソプラノ課題を学習して、メロディーの和音設定をすることにつなげます。そして和音付けを考えながら弾いたり、コードネームの学習、引き歌い、移調奏をするなど総合的かつ実用的に学習します。

受講上の注意

教科書のメロディ課題は世界の古今の音楽を使っています。歌ったりピアノで弾いたりして、カデンツの移調奏ともあわせて予習復習してください。また諸調の音階の構成音と和音の音の把握も重要です。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
試験	80
主体的な授業参加	20

教科書情報

教科書1	はじめてのソルフェージュ 5 キーボード・ハーモニー		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	吉川和夫・舟橋三千子他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V		
2	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V 更に多くの課題で学習		
3	和音の構成法と名称について		
4	和音の構成法と名称について コードネームの説明、理解と練習。28 週まで適宜演習 (ポピュラー音楽課題を含む)		
5	Step.2 IV		
6	Step.2 IV 更に多くの課題で学習		
7	Step.3 I の第 2 転回形と V		
8	Step.9 より I の第 1 転回形		

9	非和声音について
10	Step.4 属 7 の和音
11	Step.6 II、II の第 1 転回形
12	Step.7 VI
13	復習と移調練習
14	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験
15	メロディーの伴奏付け実技学習と小試験
16	借用和音について Step.5 借用和音その 1
17	借用和音について Step.5 借用和音その 1 更に多くの課題で学習
18	Step.8 借用和音その 2
19	Step.8 借用和音その 2 更に多くの課題で学習
20	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形
21	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形 更に多くの課題で学習
22	Step.10 IVの第2転回形、Vの第2転回形
23	Step.11 属 7 の転回形
24	Step. 11 属 7 の転回形 更に多くの課題で学習
25	Step.12 借用和音の転回形
26	Step. 12 借用和音の転回形 更に多くの課題で学習
27	Step.13 準固有和音
28	Step.14 転調、中学校・高校教材の復習(p42、50、51、92、93、102、104)
29	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験と復習
30	メロディの伴奏付け実技学習と小試験

科目名	鍵盤和声法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田坂 千禎、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標

鍵盤和声法(キーボードハーモニー)は、ピアノを中心とした鍵盤楽器で右手のメロディーに左手の伴奏をつけるための和声(ハーモニー)と和音(コード)の実用的な音楽的応用の理論と演奏技法の習得の演習です。音楽現場や教育現場で必要に応じてメロディーから充実した音楽に仕上げられるようにします。

授業概要

対面授業|和声法のバス課題をよく理解し、鍵盤上でソプラノ課題を学習して、メロディーの和音設定をすることにつなげます。そして和音付けを考えながら弾いたり、コードネームの学習、引き歌い、移調奏をするなど総合的かつ実用的に学習します。

受講上の注意

教科書のメロディ課題は世界の古今の音楽を使っています。歌ったりピアノで弾いたりして、カデンツの移調奏ともあわせて予習復習してください。また諸調の音階の構成音と和音の音の把握も重要です。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
試験	80
主体的な授業参加	20

教科書情報

教科書1	はじめてのソルフェージュ 5 キーボード・ハーモニー		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	吉川和夫・舟橋三千子他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V		
2	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V 更に多くの課題で学習		
3	和音の構成法と名称について		
4	和音の構成法と名称について コードネームの説明、理解と練習。28 週まで適宜演習 (ポピュラー音楽課題を含む)		
5	Step.2 IV		
6	Step.2 IV 更に多くの課題で学習		
7	Step.3 I の第 2 転回形と V		
8	Step.9 より I の第 1 転回形		

9	非和声音について
10	Step.4 属 7 の和音
11	Step.6 II、II の第 1 転回形
12	Step.7 VI
13	復習と移調練習
14	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験
15	メロディーの伴奏付け実技学習と小試験
16	借用和音について Step.5 借用和音その 1
17	借用和音について Step.5 借用和音その 1 更に多くの課題で学習
18	Step.8 借用和音その 2
19	Step.8 借用和音その 2 更に多くの課題で学習
20	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形
21	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形 更に多くの課題で学習
22	Step.10 IVの第2転回形、Vの第2転回形
23	Step.11 属 7 の転回形
24	Step. 11 属 7 の転回形 更に多くの課題で学習
25	Step.12 借用和音の転回形
26	Step. 12 借用和音の転回形 更に多くの課題で学習
27	Step.13 準固有和音
28	Step.14 転調、中学校・高校教材の復習(p42、50、51、92、93、102、104)
29	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験と復習
30	メロディの伴奏付け実技学習と小試験

科目名	鍵盤和声法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標

鍵盤和声法(キーボードハーモニー)は、ピアノを中心とした鍵盤楽器で右手のメロディーに左手の伴奏をつけるための和声(ハーモニー)と和音(コード)の実用的な音楽的応用の理論と演奏技法の習得の演習です。音楽現場や教育現場で必要に応じてメロディーから充実した音楽に仕上げられるようにします。

授業概要

対面授業|和声法のバス課題をよく理解し、鍵盤上でソプラノ課題を学習して、メロディーの和音設定をすることにつなげます。そして和音付けを考えながら弾いたり、コードネームの学習、引き歌い、移調奏をするなど総合的かつ実用的に学習します。

受講上の注意

教科書のメロディ課題は世界の古今の音楽を使っています。歌ったりピアノで弾いたりして、カデンツの移調奏ともあわせて予習復習してください。また諸調の音階の構成音と和音の音の把握も重要です。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
試験	80
主体的な授業参加	20

教科書情報

教科書1	はじめてのソルフェージュ 5 キーボード・ハーモニー		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	吉川和夫・舟橋三千子他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者としての視点から、徐々により良い音楽に仕上げるように指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V		
2	和音進行法と伴奏付け Step.1 I と V 更に多くの課題で学習		
3	和音の構成法と名称について		
4	和音の構成法と名称について コードネームの説明、理解と練習。28 週まで適宜演習 (ポピュラー音楽課題を含む)		
5	Step.2 IV		
6	Step.2 IV 更に多くの課題で学習		
7	Step.3 I の第 2 転回形と V		
8	Step.9 より I の第 1 転回形		
9	非和声音について		

10	Step.4 属 7 の和音
11	Step.6 II、II の第 1 転回形
12	Step.7 VI
13	復習と移調練習
14	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験
15	メロディーの伴奏付け実技学習と小試験
16	借用和音について Step.5 借用和音その 1
17	借用和音について Step.5 借用和音その 1 更に多くの課題で学習
18	Step.8 借用和音その 2
19	Step.8 借用和音その 2 更に多くの課題で学習
20	Step.9 IV の第 1 転回形、V の第 1 転回形
21	Step.9 IV の第 1 転回形、V の第 1 転回形 更に多くの課題で学習
22	Step.10 IV の第 2 転回形、V の第 2 転回形
23	Step.11 属 7 の転回形
24	Step. 11 属 7 の転回形 更に多くの課題で学習
25	Step.12 借用和音の転回形
26	Step. 12 借用和音の転回形 更に多くの課題で学習
27	Step.13 準固有和音
28	Step.14 転調、中学校・高校教材の復習(p42、50、51、92、93、102、104)
29	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験と復習
30	メロディの伴奏付け実技学習と小試験

科目名	コード理論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	小野田 享子				
クラス名					

授業目的と到達目標

ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。エクササイズを取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。

授業概要

対面授業とする。||音程、スケール、調号などの基本の確認。|実際の楽曲のコード進行の分析。|実用的なコード進行を用いた簡単な作曲、代理コードを使用した編曲法の|取得。|教員はバンドスタイルから、フルオーケストラの作編曲を行なっている|プロのアレンジャーが指導する。

受講上の注意

五線紙を持参|対面授業とする。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	50
学期末試験	50

教科書情報

教科書1	現代のポピュラーミュージックセオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認		
2	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認		
3	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認		
4	全キーのトライアドコード、7th コード、テトラドコード		
5	全キーのトライアドコード、7th コード、テトラドコード		
6	全キーのテンションコード(9th,11th,13th)		
7	テンションコード(9th,11th,13th)を使用した楽曲の分析		
8	♭5、＃5のコード ♭9th、＃9th のコード		
9	Ⅱ－Ⅴ－Ⅰのコード進行を用いた楽曲分析		
10	Ⅱ－Ⅴ－Ⅰのコード進行を用いた楽曲分析		
11	コード理論に沿った調号判別の仕方		
12	基礎的なブルース進行		
13	基礎的なブルース進行		

14	代理コードを用いたブルース進行(JAZZ ブルース)
15	代理コードを用いたブルース進行(JAZZ ブルース)
16	前期で学んだ内容の復習、確認
17	前期で学んだ内容の復習、確認
18	Roop を用いた楽曲のコード分析
19	Roop を用いた楽曲のコード分析
20	Roop を用いた楽曲のコード分析
21	循環コード使用の楽曲分析 (Pops)
22	循環コード使用の楽曲分析 (スタンダードジャズ)
23	循環コードの Variation
24	裏代理コードの理解
25	裏代理コードの理解
26	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
27	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
28	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
29	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
30	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)

科目名	コード理論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	小林 淑子				
クラス名					

授業目的と到達目標

ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。|コード・プログレッションを中心に学習。|Exercise を取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。

授業概要

【対面授業】|音程、スケール、調号などの基本の確認。|14 種の Tetrad Chord. Tension Note. Diatonic Chord。|II m7__ V7。 循環・逆循環コード進行。Substituted Chord。|Avoid Note。音楽用語・記号。教員が作編曲家としての経験をいかし作曲 編曲 演奏する上での基本的な知識を習得させる。

受講上の注意

各自、Text、空五線譜、筆記用具持参の事。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業内小テスト・学期末テスト	60
平常点	40

教科書情報

教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	授業内で紹介
-------	--------

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	年間カリキュラムガイダンス① 実力テスト。		
2	年間カリキュラムガイダンス② Over-Tone。Low-Interval-Limited。Major-Scale。Minor-Scale 3種 その他ポピュラー音楽でよく使用されるScaleの紹介。		
3	ポピュラー音楽：ジャンル、スタイル、アーティスト、等の紹介。 Triad Chord: major-Triad, minor-Triad		
4	4Tetrad : Major7th, Dominant7th, minor-Major7th, minor7th		
5	Tetrad : Exercise。5th変化typeのchord ①:diminished7th, Augmented (Aug-Major7th, Aug-7th)		
6	5th変化typeのchord ②:Half-diminished7th, Dominant7th, Flatted 5th, 掛留 : Dominant7th suspended 4th 付加 :付加6、付加9(add 9th)		
7	Tetrad 全14種 Exercise (筆記&聴音)		

8	転回形の説明。 ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号①
9	ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号②
10	Diatonic Chord Chord Function(Tonic, Dominant, sub-dominant, sub-dominant minor)
11	Dominant Motion & Tri-Tone Leading-Note 5th-Down Motion
12	V7 ≡ ♭ II7 (裏Chord) II m7-V7 (Two-Five) Deceptive-Cadence
13	Chord Progress Analyze
14	Secondary Dominant (副属七、借用属七)
15	前期学習項目総括及び、授業内小テスト
16	循環・逆循環 Chord進行
17	色々な終止形 Cliche/Double Cliche
18	Tension Note (Natural, Altered)
19	Chord Typeと Tension Note
20	Tension Note 総合Exercise
21	Substituted Chord①
22	Substituted Chord②
23	Substituted Chord③
24	Reharmonize 実例
25	Chord Tone Non Chord Tone Avoid Note
26	後期 総合Exercise 及び、解説
27	ポピュラー音楽史 (アメリカのポピュラー・ミュージック)概論基礎
28	学年末授業内小テスト 模擬試験 及び、解説。
29	学年末学習項目総括。及び、学年末授業内小テスト 試験
30	授業内小テスト 試験 解答と解説

科目名	コード理論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	木村 知之				
クラス名					

授業目的と到達目標

ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。Exercise を取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。

授業概要

対面授業||音程、スケール、調号などの基本の確認。|14 種の Tetrad Chord. Tension Note. Diatonic Chord。|Ⅱ m7__ V7。循環・逆循環コード進行。Substituted Chord。|Avoid Note。音楽用語・記号。など

受講上の注意

各自、Text、空五線譜、筆記用具持参の事。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
平常点	30
授業内小テスト。学年末小テスト	70

教科書情報

教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	カテスト。年間カリキュラム概要説明。		
2	Over-Tone。Low-Interval-Limited。Maj-Scale。Min-Scale 3種 その他ポピュラー音楽でよく使用されるScaleの紹介。		
3	ポピュラー音楽：ジャンル、スタイル、アーティスト、等の紹介。 Triad Chord: maj-Triad, min-Triad		
4	Tetrad : Maj7th, Dominant7th, min-Maj7th, min7th		
5	Tetrad : Exercise。 5th変化typeのchord ①:diminished7th, Augmented (Aug-Maj7th, Aug-7th)		
6	th変化typeのchord ②:Half-diminished7th, Dominant7th, Flatted 5th, 掛留 :Dominant7th suspended 4th 付加 :付加6、付加9(add 9th)		
7	Tetrad 全14種 Exercise (筆記&聴音)		
8	転回形の説明。 ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号①		
9	ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号②		

10	Diatonic Chord Chord Function(Tonic, Dominant, sub-dominant, sub-dominant minor)
11	Dominant Motion&Tri-Tone Leading-Note 5th-Down Motion
12	V7 $\equiv$ ♭ II 7 (裏Chord) II m7-V7 (Two-Five) Deceptive-Cadence
13	Chord Progress Analyze
14	Secondary Dominant (副属七、借用属七)
15	前期学習項目総括及び、授業内小テスト
16	循環・逆循環 Chord進行
17	色々な終止形 Cliche/Double Cliche
18	Tension Note (Natural, Altered)
19	hord Typeと Tension Note
20	Tension Note 総合Exercise
21	Substituted Chord①
22	Substituted Chord②
23	Substituted Chord③
24	Reharmonize 実例
25	Chord Tone Non Chord Tone Avoid Note
26	後期 総合Exercise 及び、解説
27	ポピュラー音楽史 (アメリカのポピュラー・ミュージック)概論基礎
28	学年末授業内小テスト 模擬試験 及び、解説
29	学年末学習項目総括。及び、学年末授業内小テスト 試験
30	授業内小テスト 試験 解答と解説

科目名	コード理論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	松尾 泰伸				
クラス名	【AD クラス】				

授業目的と到達目標

和音のコード化を知ること、音楽情報伝達手段の多様性を習得する。|現代のあらゆる音楽形態への、柔軟かつ的確・スピーディーな適応・対応|が図れるようになる為に。|コード表記の利便性への理解を深める。

授業概要

対面授業||音程の復習。|コードネームの必要性和利便性について。|現場レベルで通用する、全てのコードネームの仕組み。|クラシック音楽等、既成曲へのコード表記。

受講上の注意

音楽理論(楽典・通論等)の、スケール・調号・音程・和音までの復習。|講義は30回全部が関連付けられて進んでいくので、毎回の授業内容をよく理解把握して進めていくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
1年を通して授業中に実施される、演習課題の成績評価	70
授業に取り組む姿勢	30

教科書情報

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	
-------	--

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
実務経験: 作曲家・ピアニストとして多くの作曲・編曲・演奏経験を持つ担当教員が、コードによる有益な使用法を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	【対面】 音程 復習 コード理論概要(必要性・利便性 etc.)		
2	【対面】 コードの仕組み 音程 単音程 復習		
3	【対面】 コードの仕組み2 コードの表記 音程 複音程 復習 長音階上の3和音		
4	【対面】 コードの仕組み3 コードの表記の仕組み 音程まとめ 演習		
5	【対面】 コード 3和音(トライアド) メジャーダイアトニック メジャーコードとマイナーコードの関係		
6	【対面】 コード 3和音(トライアド) ♯の付いたコード		
7	【対面】 コード 3和音(トライアド)まとめ 演習		
8	【対面】 コード 4和音(7th)		
9	【対面】 7th の和音 M7 m7 7		
10	【対面】 7th の和音 M7 m7 7 ♯の付いたコード		
11	【対面】 7th の和音 まとめ 演習		

12	【対面】 7th の和音のヴァリエーション (b5)(#5) mM7
13	【対面】 特殊なコード aug aug7 dim dim7
14	【対面】 特殊なコード sus4 7sus4
15	【対面】 特殊なコード add2 add9 6 69 omit
16	【対面】 テンションコードの仕組み
17	【対面】 テンションコード 9th
18	【対面】 テンションコード 9th 演習
19	【対面】 テンションコード 11th 演習
20	【対面】 テンションコード 13th 演習
21	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ
22	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ 演習
23	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ 演習
24	【対面】 オンコード 分数コード(転回形) ベース音が、Root(根音)以外の構成音のいずれかの場 合
25	【対面】 オンコード 分数コード(転回形) 演習
26	【対面】 オンコード 分数コード(テンション系) ベース音が、上にのる和音の構成音以外の場合
27	【対面】 オンコード 分数コード(テンション系) 演習
28	【対面】 既成曲のコードネーム化
29	【対面】 既成曲へのコードネーム付け
30	【対面】 既成曲へのコードネーム付け

科目名	コンポーザング論		年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期		形態	講義		
教員名	田中 久美子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
クラシック音楽の作曲法に関する理論全般の解説と主要な作品について 様々な角度からの楽曲構造分析を行い、音楽の実際を学びます。						
授業概要						
授業は「対面授業」で行います。 色々な音楽作品に触れながら、楽典、和声法、楽式論、楽器論、管弦楽法 の基本を学びつつ、クラシック音楽の広い理解を目指します。						
受講上の注意						
日頃よりクラシックの音楽作品に触れ、関心を高めておくことが望ましい。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
総合評価(普段の授業への取り組み、レポート提出)				100		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント教材を配布する。					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	舞曲		
3	リズムと拍子の取り方		
4	バレエ音楽		
5	物語をオーケストラ曲で表現すること		
6	ベートーヴェン作品の考察		
7	オーケストラの楽器		
8	ピアノという楽器について		
9	オペラについて ～作曲家から見た物語と音楽～		
10	音楽の都、ウィーン。		
11	バッハの音楽とパイプオルガン		
12	協奏曲について。		

13	指揮者について。
14	映像と効果音
15	ミュージカル映画鑑賞

科目名	コンポーザング論		年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期		形態	講義		
教員名	田中 久美子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
クラシック音楽の作曲法に関する理論全般の解説と主要な作品について 様々な角度からの楽曲構造分析を行い、音楽の実際を学びます。						
授業概要						
授業は「対面授業」で行います。 色々な音楽作品に触れながら、楽典、和声法、楽式論、楽器論、管弦楽法 の基本を学びつつ、クラシック音楽の広い理解を目指します。						
受講上の注意						
日頃よりクラシックの音楽作品に触れ、関心を高めておくことが望ましい。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
総合評価(普段の授業への取り組み、レポート提出)				100		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント教材を配布する。					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして指導します。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	導入		
2	舞曲		
3	リズムと拍子の取り方		
4	バレエ音楽		
5	物語をオーケストラ曲で表現すること		
6	ベートーヴェン作品の考察		
7	オーケストラの楽器		
8	ピアノという楽器について		
9	オペラについて ～作曲家から見た物語と音楽～		
10	音楽の都、ウィーン。		
11	バッハの音楽とパイプオルガン		
12	協奏曲について。		

13	指揮者について。
14	映像と効果音
15	ミュージカル映画鑑賞

科目名	指揮法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	福永 吉宏				
クラス名	AD コース対象				
授業目的と到達目標					
音楽作品を演奏する際、合奏者に指揮者として自分の音楽を伝える手段として、人間の本能的な体の動きを使い音楽の内容までを深く感じ取らすことを目的とする。単に指揮を振るテクニックを学ぶものではなく、個人の持つ人間性と音楽の知識の深さをいかに相手（合奏者）に伝えるかを目標とする。					
授業概要					
指揮者の在存する前、つまり合奏を行う時に、指揮者が必要となる音楽の作品から取り組むことになる。いわゆるバロック音楽の作品から古典派、ロマン派、そして近代までの作品を取り上げる。その際、指揮者として音楽作品を解釈し、自らが「分かった」と理解することを体験するようにする。教員が指揮者としての経験を活かし、指揮法の様々な表現方法を修得させる。					
受講上の注意					
音楽作品のもつ要素（テンポ、リズム、アーティキュレーション、ダイナミック、音色など）を学習し、自分なりの作品の解釈を指揮法なるもので表現する。					
成績評価方法・基準					
種別			割合（％）		
授業への積極性、質疑応答への参加、試験を総合的に評価			100		
教科書情報					
教科書1	演奏の原理				
出版社名	シンフォニア出版	著者名	ハンス・ペーター・シュミッツ		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			

参考書情報			
参考書名1	授業の中で適宜指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	まずバロック音楽であるバッハやヘンデルの作品を中心に、モーツァルト、ベートーヴェンなどの作品を取り上げる。 バッハの管弦楽組曲を取りあげる。		
2	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。		
3	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。		
4	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。		
5	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。		
6	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。		
7	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。		
8	モーツァルトの交響曲を取りあげる。		
9	モーツァルトの交響曲を取りあげる。		
10	モーツァルトの交響曲を取りあげる。		

11	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
12	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
13	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
14	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
15	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
16	ブラームス、シューベルトの作品からロマン派、近代への作品へと移り、最後はウィーンのワルツまで取り上げる。
17	シューベルトの交響曲を取りあげる。
18	シューベルトの交響曲を取りあげる。
19	シューベルトの交響曲を取りあげる。
20	ブラームスの交響曲を取りあげる。
21	ブラームスの交響曲を取りあげる。
22	ブラームスの交響曲を取りあげる。
23	ブラームスの交響曲を取りあげる。
24	ブラームスの交響曲を取りあげる。
25	ブラームスの交響曲を取りあげる。
26	ブラームスの交響曲を取りあげる。
27	ウィーンのワルツを取りあげる。
28	ウィーンのワルツを取りあげる。
29	ウィーンのワルツを取りあげる。
30	ウィーンのワルツを取りあげる。

科目名	指揮法	年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	高谷 光信				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽性豊かな表現をするための基本的な指揮法の習得を目的とする。|本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識および技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。||指揮者と指導者の目線で楽譜を捉えて、それを伝える身体的表現を身につける。教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容および教材に|関連づけて主体的に探求する。 |

授業概要

対面授業||実際に教職現場や社会人のコーラス、吹奏楽、オーケストラ等、指揮をす|る場面は多数あり、音楽を専門で勉強した学生には指揮する機会が訪れる|ことが多い。合唱の指揮を主眼として実習を行い、その技法を通して必要|な理論、知識を深め、実践力を養う。この授業では基本的なバトンテクニ|ックを理解して、いか|にして楽曲の指揮をして音楽的表現をしていくのか|を追求する。 |

受講上の注意

基本的な指揮技術の復習および、楽曲研究をすること。|教職課程履修学生は、中高教育実習での研究授業場面や卒業後の中高正規|授業での指導場面を想定して、本科目の修得内容を活用しつつ、「中高教|科の自主的教材研究」に主体的に取り組む。その際、当該教科の学習指導|要領および教科書等を積極的に活用する。 |

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業への積極的参加度	70
レポート	30

教科書情報

教科書1	教材および資料等のプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	第 1 回 はじめに (1)指揮について (2)指揮の必要性 (3)合唱と独唱・重唱の違いについて		
2	第 2 回 基本的な指揮の知識 (1)腕、手、指の動きについて (2)指揮棒について		
3	第 3 回 2 拍子・4 拍子と 3 拍子の振り方(基本形)		
4	第 4 回 2 拍子・4 拍子と 3 拍子の振り方(アウフタクトとニュアンス指示)		
5	第 5 回 6 拍子の振り方(基本形)		
6	第 6 回 6 拍子の振り方(アウフタクトとニュアンス指示)		
7	第 7 回 6 拍子以外の複合拍子の振り方(基本形)		
8	第 8 回 合唱の指揮について 息使い、フレーズの重要性について		

9	第 9 回 歌詞の発音と指示
10	第 10 回 合唱指揮の実践
11	第 11 回 テンポ、リズム、歌い出しの指示について
12	第 12 回 各声部および伴奏とのバランス、伴奏者への指示について(基礎)
13	第 13 回 各声部および伴奏とのバランス、伴奏者への指示について(応用)
14	第 14 回 ニュアンス指示と左手の使い方(基礎/応用)
15	第 15 回 指揮実技試験の実施、レポート
16	第 16 回 はじめに (1)合奏指揮と合唱指揮における共通、相違点について (2)楽器の編成と指揮の関係について
17	第 17 回 基本的な合奏指揮のための知識 (1)弦楽器について (2)管楽器について (3)打楽器について
18	第 18 回 リタルダンド、分割を含む楽曲の指揮法(基礎)
19	第 19 回 リタルダンド、分割を含む楽曲の指揮法(応用)
20	第 20 回 フェルマータ、休符を含むリズムのある楽曲の指揮法(基礎)
21	第 21 回 フェルマータ、休符を含むリズムのある楽曲の指揮法(応用)
22	第 22 回 合奏指揮について 合奏の編成規模について
23	第 23 回 各種楽曲の楽譜研究について 教育用楽器による編成の楽譜
24	第 24 回 吹奏楽の楽譜 管弦楽小編成の楽譜
25	第 25 回 合奏指揮の実践
26	第 26 回 教育用楽器による編成の楽曲指揮(基礎)
27	第 27 回 教育用楽器による編成の楽曲指揮(応用)
28	第 28 回 吹奏楽など小編成の楽曲指揮(基礎)
29	第 29 回 吹奏楽など小編成の楽曲指揮(応用)
30	第 30 回 まとめとテスト、レポート

科目名	声楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)	
教員名	東野 亜弥子、福田 真理子、宇仁 節、岩城 拓也、樽谷 昌子、南川 良治、村井 幹子、水口 聡、中川 恵理子、松井 るみ、田代 睦美、永松 圭子、三原 剛、田代 恭也、河田 早紀、秋本 靖仁、中島 康博、福井 雅志、磯本 龍成				
クラス名					
授業目的と到達目標					
基礎的発声法を学習しながら、各自の専門分野においてより豊かな音楽性を習得する為、声楽を学ぶ。 学校教育(音楽科)や音楽教育の現場において将来教職に就く者のとして授業の発信力となる「発声法」の修得や「読譜力」の充実を目指す。					
授業概要					
基本的に対面授業とするが、新型コロナウイルス感染が拡大するなど社会情勢により変更の可能性はある。 担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 《試験曲》 前期:読譜力テスト(コンコーネ 50 番より 5 曲 試験当日 1 曲指定) 後期:声楽作品歌唱テスト					
受講上の注意					
しっかりとした予習・復習					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
実技試験			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
読譜力テスト不合格者及びレッスン受講回数が 20 回に達していない場合は単位認定出来ない。			
教員実務経験			
声楽家としての演奏活動や指導者としての経験を活かし技術、表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
2	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
3	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
4	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
5	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		

[illegible]

22	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
23	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
24	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
25	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
26	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
27	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
28	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
29	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
30	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。

科目名	声楽2	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	村井 幹子、河田 早紀				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標

＜声楽 1＞で習得したことを基礎にして、より深い研究を続ける。|声楽を通じて、舞台芸術学科の各分野での表現を豊かにする。

授業概要

基本的には対面授業とする。但し、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令等の特別な状況下においては、遠隔授業になる場合がある。|前期はイタリア古典歌曲、F. P. Tosti、V. Bellini、S. Donaudy の歌曲の中から 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)|後期は任意の日本歌曲 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)以前の試験で演奏した曲は不可。|前期・後期共に、声楽的発声をさらに習得する。

受講上の注意

＜声楽 1＞での反省を含め、積極的な態度で授業に臨むこと。|指導教員からのアドバイスを元に、予習・復習等の授業準備をすること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験	70
平常点	30

教科書情報

教科書1	担当教員が各自に相応しい課題曲を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
声楽家として歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	＜声楽 1＞で取り組んだ楽譜を持参し、担当教員と相談して曲目を決める。		
2	イタリア語の発音を復習し、改めて学び直す。そして、発展させていく。		
3	グループレッスンであるので、自分が選曲した以外の曲目のイタリア語の発音も学ぶようにする。 (基本的にグループレッスンであるが、感染防止の観点から個人レッスンの形を取る場合がある。 その際は、イタリア語の発音課題について担当教員の指示に従うこと。)		
4	前回までの授業の中で、イタリア語の発音について教員から受けたアドバイスを理解し、改善の有無を実感する。		
5	少しずつイタリア語で歌うことにも慣れてくる頃。 母音のつながりによってレガートに歌えるように練習し、技術を発展させていく。		
6	今まで取り組んできた課題曲から他の曲に変更して、歌唱の幅を広げることも検討する。		

7	いろいろな課題に取り組むことが、充実した学びになる要素と捉え、曲のレパートリーを増やす。
8	これまで少しずつ身に付けてきたことを糧に、より一層技術習得に努力する。 詩の内容を理解し、音楽的な表現へと発展させていく。
9	課題にしっかり取り組み、各自の持つ力を発揮できるよう、歌唱表現を発展させる。
10	古典歌曲から近代歌曲までの幅広い課題曲の中から、教員と相談の上、試験曲を絞り込む。
11	試験局として選択した曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を更に研究する。
12	教員から繰り返し指導を受けた箇所をよく復習し、声楽作品としての演奏の完成度を高めていく。
13	選択した試験曲の表現力・完成度を上げる為、暗譜での歌唱を実践していく。
14	選択した試験曲の作曲家名・題名を、原語で正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージし、曲を完成させる。
15	前期実技試験を行う。 後期課題、個々の今後の目標について、教員が提示する。 前期の総括。
16	後期課題の日本歌曲を、教員の指示の元、選曲する。 (声楽1で習得した曲以外の曲を選ぶ。)
17	日本語の美しさを再認識して、詩の内容などの理解を深める。
18	日本語特有のリズム感、言葉と音楽の美しい関係性に目を向け、日本歌曲独特の味わいが感じられる歌唱を研究する。
19	教員からの導きを元に詩をよく読み解き、日本語の美しい発音・発声に目を向けて、叙情的で滑らかな歌唱を目指す。
20	日本語に相応しい発声を研究し、美しい音楽表現を習得する。
21	数多くの日本歌曲に触れ、表現の幅を広げる。
22	レパートリーを増やし、これまでに習得してきた曲と異なった表現を要する曲に新たに取り組む。
23	日本語の美しい発音を歌唱で活かすには自身に何が必要か、教員のアドバイスの元、研究する。
24	詩の情景を味わい、美しい日本語の発声を音楽に結び付ける。
25	教員のアドバイスの元、これまで練習してきた曲の中から、自身の個性が最も活かせる曲を選び、実技試験に向けて試験曲を絞り込む。
26	試験で歌う曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を、より深く研究する。
27	日本歌曲の美しい歌唱表現を目指し、暗譜での演奏をしっかりとイメージできるようにする。(暗譜の取り組み)
28	選択した試験曲の旋律の流れ、リズムの変化、強弱を改めて理解し、歌唱表現につなげる。
29	選択した試験曲の作曲家名・題名を正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージして、曲を完成させる。

30	後期実技試験を行う。 年間の総括と、次年度への目標、技術向上につなげるための課題を教員が提示する。
----	---

科目名	声楽2	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	村井 幹子、中島 康博				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標

＜声楽 1＞で習得したことを基礎にして、より深い研究を続ける。|声楽を通じて、舞台芸術学科の各分野での表現を豊かにする。

授業概要

基本的には対面授業とする。但し、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令等の特別な状況下においては、遠隔授業になる場合がある。|前期はイタリア古典歌曲、F. P. Tosti、V. Bellini、S. Donaudy の歌曲の中から 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)|後期は任意の日本歌曲 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)以前の試験で演奏した曲は不可。|前期・後期共に、声楽的発声をさらに習得する。

受講上の注意

＜声楽 1＞での反省を含め、積極的な態度で授業に臨むこと。|指導教員からのアドバイスを元に、予習・復習等の授業準備をすること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験	70
平常点	30

教科書情報

教科書1	担当教員が各自に相応しい課題曲を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
声楽家として歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	＜声楽 1＞で取り組んだ楽譜を持参し、担当教員と相談して曲目を決める。		
2	イタリア語の発音を復習し、改めて学び直す。そして、発展させていく。		
3	グループレッスンであるので、自分が選曲した以外の曲目のイタリア語の発音も学ぶようにする。 (基本的にグループレッスンであるが、感染防止の観点から個人レッスンの形を取る場合がある。 その際は、イタリア語の発音課題について担当教員の指示に従うこと。)		
4	前回までの授業の中で、イタリア語の発音について教員から受けたアドバイスを理解し、改善の有無を実感する。		
5	少しずつイタリア語で歌うことにも慣れてくる頃。 母音のつながりによってレガートに歌えるように練習し、技術を発展させていく。		
6	今まで取り組んできた課題曲から他の曲に変更して、歌唱の幅を広げることも検討する。		

7	いろいろな課題に取り組むことが、充実した学びになる要素と捉え、曲のレパートリーを増やす。
8	これまで少しずつ身に付けてきたことを糧に、より一層技術習得に努力する。 詩の内容を理解し、音楽的な表現へと発展させていく。
9	課題にしっかり取り組み、各自の持つ力を発揮できるよう、歌唱表現を発展させる。
10	古典歌曲から近代歌曲までの幅広い課題曲の中から、教員と相談の上、試験曲を絞り込む。
11	試験局として選択した曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を更に研究する。
12	教員から繰り返し指導を受けた箇所をよく復習し、声楽作品としての演奏の完成度を高めていく。
13	選択した試験曲の表現力・完成度を上げる為、暗譜での歌唱を実践していく。
14	選択した試験曲の作曲家名・題名を、原語で正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージし、曲を完成させる。
15	前期実技試験を行う。 後期課題、個々の今後の目標について、教員が提示する。 前期の総括。
16	後期課題の日本歌曲を、教員の指示の元、選曲する。 (声楽1で習得した曲以外の曲を選ぶ。)
17	日本語の美しさを再認識して、詩の内容などの理解を深める。
18	日本語特有のリズム感、言葉と音楽の美しい関係性に目を向け、日本歌曲独特の味わいが感じられる歌唱を研究する。
19	教員からの導きを元に詩をよく読み解き、日本語の美しい発音・発声に目を向けて、叙情的で滑らかな歌唱を目指す。
20	日本語に相応しい発声を研究し、美しい音楽表現を習得する。
21	数多くの日本歌曲に触れ、表現の幅を広げる。
22	レパートリーを増やし、これまでに習得してきた曲と異なった表現を要する曲に新たに取り組む。
23	日本語の美しい発音を歌唱で活かすには自身に何が必要か、教員のアドバイスの元、研究する。
24	詩の情景を味わい、美しい日本語の発声を音楽に結び付ける。
25	教員のアドバイスの元、これまで練習してきた曲の中から、自身の個性が最も活かせる曲を選び、実技試験に向けて試験曲を絞り込む。
26	試験で歌う曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を、より深く研究する。
27	日本歌曲の美しい歌唱表現を目指し、暗譜での演奏をしっかりとイメージできるようにする。(暗譜の取り組み)
28	選択した試験曲の旋律の流れ、リズムの変化、強弱を改めて理解し、歌唱表現につなげる。
29	選択した試験曲の作曲家名・題名を正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージして、曲を完成させる。

30	後期実技試験を行う。 年間の総括と、次年度への目標、技術向上につなげるための課題を教員が提示する。
----	---

科目名	声楽2	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	村井 幹子、松井 るみ				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標

＜声楽 1＞で習得したことを基礎にして、より深い研究を続ける。|声楽を通じて、舞台芸術学科の各分野での表現を豊かにする。

授業概要

基本的には対面授業とする。但し、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令等の特別な状況下においては、遠隔授業になる場合がある。|前期はイタリア古典歌曲、F. P. Tosti、V. Bellini、S. Donaudy の歌曲の中から 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)|後期は任意の日本歌曲 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)以前の試験で演奏した曲は不可。|前期・後期共に、声楽的発声をさらに習得する。

受講上の注意

＜声楽 1＞での反省を含め、積極的な態度で授業に臨むこと。|指導教員からのアドバイスを元に、予習・復習等の授業準備をすること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験	70
平常点	30

教科書情報

教科書1	担当教員が各自に相応しい課題曲を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
声楽家として歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	＜声楽 1＞で取り組んだ楽譜を持参し、担当教員と相談して曲目を決める。		
2	イタリア語の発音を復習し、改めて学び直す。そして、発展させていく。		
3	グループレッスンであるので、自分が選曲した以外の曲目のイタリア語の発音も学ぶようにする。 (基本的にグループレッスンであるが、感染防止の観点から個人レッスンの形を取る場合がある。 その際は、イタリア語の発音課題について担当教員の指示に従うこと。)		
4	前回までの授業の中で、イタリア語の発音について教員から受けたアドバイスを理解し、改善の有無を実感する。		
5	少しずつイタリア語で歌うことにも慣れてくる頃。 母音のつながりによってレガートに歌えるように練習し、技術を発展させていく。		
6	今まで取り組んできた課題曲から他の曲に変更して、歌唱の幅を広げることも検討する。		

7	いろいろな課題に取り組むことが、充実した学びになる要素と捉え、曲のレパートリーを増やす。
8	これまで少しずつ身に付けてきたことを糧に、より一層技術習得に努力する。 詩の内容を理解し、音楽的な表現へと発展させていく。
9	課題にしっかり取り組み、各自の持つ力を発揮できるよう、歌唱表現を発展させる。
10	古典歌曲から近代歌曲までの幅広い課題曲の中から、教員と相談の上、試験曲を絞り込む。
11	試験局として選択した曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を更に研究する。
12	教員から繰り返し指導を受けた箇所をよく復習し、声楽作品としての演奏の完成度を高めていく。
13	選択した試験曲の表現力・完成度を上げる為、暗譜での歌唱を実践していく。
14	選択した試験曲の作曲家名・題名を、原語で正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージし、曲を完成させる。
15	前期実技試験を行う。 後期課題、個々の今後の目標について、教員が提示する。 前期の総括。
16	後期課題の日本歌曲を、教員の指示の元、選曲する。 (声楽1で習得した曲以外の曲を選ぶ。)
17	日本語の美しさを再認識して、詩の内容などの理解を深める。
18	日本語特有のリズム感、言葉と音楽の美しい関係性に目を向け、日本歌曲独特の味わいが感じられる歌唱を研究する。
19	教員からの導きを元に詩をよく読み解き、日本語の美しい発音・発声に目を向けて、叙情的で滑らかな歌唱を目指す。
20	日本語に相応しい発声を研究し、美しい音楽表現を習得する。
21	数多くの日本歌曲に触れ、表現の幅を広げる。
22	レパートリーを増やし、これまでに習得してきた曲と異なった表現を要する曲に新たに取り組む。
23	日本語の美しい発音を歌唱で活かすには自身に何が必要か、教員のアドバイスの元、研究する。
24	詩の情景を味わい、美しい日本語の発声を音楽に結び付ける。
25	教員のアドバイスの元、これまで練習してきた曲の中から、自身の個性が最も活かせる曲を選び、実技試験に向けて試験曲を絞り込む。
26	試験で歌う曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を、より深く研究する。
27	日本歌曲の美しい歌唱表現を目指し、暗譜での演奏をしっかりとイメージできるようにする。(暗譜の取り組み)
28	選択した試験曲の旋律の流れ、リズムの変化、強弱を改めて理解し、歌唱表現につなげる。
29	選択した試験曲の作曲家名・題名を正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージして、曲を完成させる。

30	後期実技試験を行う。 年間の総括と、次年度への目標、技術向上につなげるための課題を教員が提示する。
----	---

科目名	声楽2	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	村井 幹子、中川 恵理子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標

＜声楽 1＞で習得したことを基礎にして、より深い研究を続ける。|声楽を通じて、舞台芸術学科の各分野での表現を豊かにする。

授業概要

基本的には対面授業とする。但し、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令等の特別な状況下においては、遠隔授業になる場合がある。|前期はイタリア古典歌曲、F. P. Tosti、V. Bellini、S. Donaudy の歌曲の中から 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)|後期は任意の日本歌曲 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)以前の試験で演奏した曲は不可。|前期・後期共に、声楽的発声をさらに習得する。

受講上の注意

＜声楽 1＞での反省を含め、積極的な態度で授業に臨むこと。|指導教員からのアドバイスを元に、予習・復習等の授業準備をすること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験	70
平常点	30

教科書情報

教科書1	担当教員が各自に相応しい課題曲を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
声楽家として歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	＜声楽 1＞で取り組んだ楽譜を持参し、担当教員と相談して曲目を決める。		
2	イタリア語の発音を復習し、改めて学び直す。そして、発展させていく。		
3	グループレッスンであるので、自分が選曲した以外の曲目のイタリア語の発音も学ぶようにする。 (基本的にグループレッスンであるが、感染防止の観点から個人レッスンの形を取る場合がある。 その際は、イタリア語の発音課題について担当教員の指示に従うこと。)		
4	前回までの授業の中で、イタリア語の発音について教員から受けたアドバイスを理解し、改善の有無を実感する。		
5	少しずつイタリア語で歌うことにも慣れてくる頃。 母音のつながりによってレガートに歌えるように練習し、技術を発展させていく。		
6	今まで取り組んできた課題曲から他の曲に変更して、歌唱の幅を広げることも検討する。		

7	いろいろな課題に取り組むことが、充実した学びになる要素と捉え、曲のレパートリーを増やす。
8	これまで少しずつ身に付けてきたことを糧に、より一層技術習得に努力する。 詩の内容を理解し、音楽的な表現へと発展させていく。
9	課題にしっかり取り組み、各自の持つ力を発揮できるよう、歌唱表現を発展させる。
10	古典歌曲から近代歌曲までの幅広い課題曲の中から、教員と相談の上、試験曲を絞り込む。
11	試験局として選択した曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を更に研究する。
12	教員から繰り返し指導を受けた箇所をよく復習し、声楽作品としての演奏の完成度を高めていく。
13	選択した試験曲の表現力・完成度を上げる為、暗譜での歌唱を実践していく。
14	選択した試験曲の作曲家名・題名を、原語で正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージし、曲を完成させる。
15	前期実技試験を行う。 後期課題、個々の今後の目標について、教員が提示する。 前期の総括。
16	後期課題の日本歌曲を、教員の指示の元、選曲する。 (声楽1で習得した曲以外の曲を選ぶ。)
17	日本語の美しさを再認識して、詩の内容などの理解を深める。
18	日本語特有のリズム感、言葉と音楽の美しい関係性に目を向け、日本歌曲独特の味わいが感じられる歌唱を研究する。
19	教員からの導きを元に詩をよく読み解き、日本語の美しい発音・発声に目を向けて、叙情的で滑らかな歌唱を目指す。
20	日本語に相応しい発声を研究し、美しい音楽表現を習得する。
21	数多くの日本歌曲に触れ、表現の幅を広げる。
22	レパートリーを増やし、これまでに習得してきた曲と異なった表現を要する曲に新たに取り組む。
23	日本語の美しい発音を歌唱で活かすには自身に何が必要か、教員のアドバイスの元、研究する。
24	詩の情景を味わい、美しい日本語の発声を音楽に結び付ける。
25	教員のアドバイスの元、これまで練習してきた曲の中から、自身の個性が最も活かせる曲を選び、実技試験に向けて試験曲を絞り込む。
26	試験で歌う曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を、より深く研究する。
27	日本歌曲の美しい歌唱表現を目指し、暗譜での演奏をしっかりとイメージできるようにする。(暗譜の取り組み)
28	選択した試験曲の旋律の流れ、リズムの変化、強弱を改めて理解し、歌唱表現につなげる。
29	選択した試験曲の作曲家名・題名を正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージして、曲を完成させる。

30	後期実技試験を行う。 年間の総括と、次年度への目標、技術向上につなげるための課題を教員が提示する。
----	---

科目名	声楽2	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	村井 幹子、南川 良治				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標

＜声楽 1＞で習得したことを基礎にして、より深い研究を続ける。|声楽を通じて、舞台芸術学科の各分野での表現を豊かにする。

授業概要

基本的には対面授業とする。但し、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令等の特別な状況下においては、遠隔授業になる場合がある。|前期はイタリア古典歌曲、F. P. Tosti、V. Bellini、S. Donaudy の歌曲の中から 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)|後期は任意の日本歌曲 1 曲を選曲し試験を受ける。(移調は可)以前の試験で演奏した曲は不可。|前期・後期共に、声楽的発声をさらに習得する。

受講上の注意

＜声楽 1＞での反省を含め、積極的な態度で授業に臨むこと。|指導教員からのアドバイスを元に、予習・復習等の授業準備をすること。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
実技試験	70
平常点	30

教科書情報

教科書1	担当教員が各自に相応しい課題曲を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
声楽家として歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	＜声楽 1＞で取り組んだ楽譜を持参し、担当教員と相談して曲目を決める。		
2	イタリア語の発音を復習し、改めて学び直す。そして、発展させていく。		
3	グループレッスンであるので、自分が選曲した以外の曲目のイタリア語の発音も学ぶようにする。 (基本的にグループレッスンであるが、感染防止の観点から個人レッスンの形を取る場合がある。 その際は、イタリア語の発音課題について担当教員の指示に従うこと。)		
4	前回までの授業の中で、イタリア語の発音について教員から受けたアドバイスを理解し、改善の有無を実感する。		
5	少しずつイタリア語で歌うことにも慣れてくる頃。 母音のつながりによってレガートに歌えるように練習し、技術を発展させていく。		
6	今まで取り組んできた課題曲から他の曲に変更して、歌唱の幅を広げることも検討する。		

7	いろいろな課題に取り組むことが、充実した学びになる要素と捉え、曲のレパートリーを増やす。
8	これまで少しずつ身に付けてきたことを糧に、より一層技術習得に努力する。 詩の内容を理解し、音楽的な表現へと発展させていく。
9	課題にしっかり取り組み、各自の持つ力を発揮できるよう、歌唱表現を発展させる。
10	古典歌曲から近代歌曲までの幅広い課題曲の中から、教員と相談の上、試験曲を絞り込む。
11	試験局として選択した曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を更に研究する。
12	教員から繰り返し指導を受けた箇所をよく復習し、声楽作品としての演奏の完成度を高めていく。
13	選択した試験曲の表現力・完成度を上げる為、暗譜での歌唱を実践していく。
14	選択した試験曲の作曲家名・題名を、原語で正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージし、曲を完成させる。
15	前期実技試験を行う。 後期課題、個々の今後の目標について、教員が提示する。 前期の総括。
16	後期課題の日本歌曲を、教員の指示の元、選曲する。 (声楽1で習得した曲以外の曲を選ぶ。)
17	日本語の美しさを再認識して、詩の内容などの理解を深める。
18	日本語特有のリズム感、言葉と音楽の美しい関係性に目を向け、日本歌曲独特の味わいが感じられる歌唱を研究する。
19	教員からの導きを元に詩をよく読み解き、日本語の美しい発音・発声に目を向けて、叙情的で滑らかな歌唱を目指す。
20	日本語に相応しい発声を研究し、美しい音楽表現を習得する。
21	数多くの日本歌曲に触れ、表現の幅を広げる。
22	レパートリーを増やし、これまでに習得してきた曲と異なった表現を要する曲に新たに取り組む。
23	日本語の美しい発音を歌唱で活かすには自身に何が必要か、教員のアドバイスの元、研究する。
24	詩の情景を味わい、美しい日本語の発声を音楽に結び付ける。
25	教員のアドバイスの元、これまで練習してきた曲の中から、自身の個性が最も活かせる曲を選び、実技試験に向けて試験曲を絞り込む。
26	試験で歌う曲を重点的に仕上げていく。 発声の安定、ブレス、音楽表現を、より深く研究する。
27	日本歌曲の美しい歌唱表現を目指し、暗譜での演奏をしっかりとイメージできるようにする。(暗譜の取り組み)
28	選択した試験曲の旋律の流れ、リズムの変化、強弱を改めて理解し、歌唱表現につなげる。
29	選択した試験曲の作曲家名・題名を正確に言えるようにする。 試験での歌唱をイメージして、曲を完成させる。

30	後期実技試験を行う。 年間の総括と、次年度への目標、技術向上につなげるための課題を教員が提示する。
----	---

科目名	声楽実技3		年次	3	単位数	6
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)		
教員名	東野 亜弥子、福田 真理子、宇仁 節、岩城 拓也、樽谷 昌子、南川 良治、村井 幹子、水口 聡、中川 恵理子、松井 るみ、田代 睦美、永松 圭子、三原 剛、田代 恭也、河田 早紀、秋本 靖仁、中島 康博、福井 雅志、磯本 龍成					
クラス名						
授業目的と到達目標						
『歌う』という音楽の基本行為から導き出される豊かな音楽性の探求、『詩と音楽の融合』という音楽領域で唯一の分野である声楽作品を音楽的・文学的に研究することにより音楽家としての情操を養い、演奏表現研究を通じて優れた演奏家・教育者を育成する。						
授業概要						
基本的に対面授業とするが、新型コロナウイルス感染が拡大するなど社会情勢により変更の可能性はある。 担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 基礎的発声法を学習しながら、各自の専門分野においてより豊かな音楽性を習得する為、声楽を学ぶ。学校教育(音楽科)や音楽教育の現場において将来教職に就く者のとって授業の発信力となる「発声法」の修得や「読譜力」の充実を目指す。 [試験]前期:声楽作品の歌唱 後期:声楽作品の歌唱						
受講上の注意						
しっかりとした予習・復習						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期 実技試験				100		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
レッスン受講回数が 20 回に達していない場合は単位認定出来ない。			
教員実務経験			
声楽家としての演奏活動や指導者としての経験を活かし技術、表現力を習得させる。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
2	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		
3	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。		

20	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
21	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
22	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
23	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
24	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
25	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
26	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
27	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
28	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
29	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
30	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。

科目名	西洋音楽の歴史と理論	年次	0	単位数	4
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	講義		
教員名	嶋田 久美				
クラス名					
授業目的と到達目標					
・西洋音楽史に関する基礎的な知識を習得する。 ・時代ごとの音楽様式の特徴と歴史的背景を理解し、自身の演奏や制作活動とのつながりを考え、説明する力を身につける。					
授業概要					
・授業形態:「対面授業」とする。 ・前期:古代ギリシア・ローマからバロック期までの音楽史の流れを学ぶ。 ・後期:古典派から現代にいたるまでの音楽史の流れを学ぶ。					
受講上の注意					
・毎回の授業でリアクションペーパーの作成を実施するので、積極的に取り組むこと。 ・配布資料と参考書、および自身のノートを活用し、前回までの講義の流れを振り返っておくこと。 ・入門的なものでかまわないので、西洋音楽史に関する図書をあらかじめ通読しておくことが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
主体的な授業参加(リアクションペーパー)			50		
期末レポート			50		
教科書情報					
教科書1	適宜、資料配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1	決定版 はじめての音楽史		
出版社名	音楽之友社	著者名	片桐功ほか
参考書名2	音楽史を学ぶ		
出版社名	教育芸術社	著者名	久保田慶一編
参考書名3	グラウト/パリスカ 新西洋音楽史 上・中・下		
出版社名	音楽之友社	著者名	D.J. グラウト & C.V. パリスカ
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
受講生の関心や理解度に応じて、適宜、進度を調整する。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ガイダンス: 一年の授業計画・成績評価の基準・リアクションペーパーの作成要領の説明、音楽に関するアンケートの実施		
2	前期の概説		
3	古代ギリシア・ローマ		
4	中世①		
5	中世②		
6	中世③		
7	中世④		
8	ルネサンス①		
9	ルネサンス②		
10	ルネサンス③		

11	ルネサンス④
12	バロック①
13	バロック②
14	バロック③
15	バロック④
16	前期の振り返り、後期の概説
17	期末レポート作成要領の説明
18	前古典派①
19	前古典派②
20	古典派①
21	古典派②
22	古典派③
23	古典派④
24	ロマン派①
25	ロマン派②
26	ロマン派③
27	現代①
28	現代②
29	現代③
30	総括

科目名	ソルフェージュ1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田中 伴子、河合 摂子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。					
授業概要					
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。					
受講上の注意					
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
後期試験			40		
前期試験			40		
主体的な授業参加			20		
教科書情報					
教科書1	適宜プリント配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	木短調にて
11	へ長調にて
12	二短調にて
13	木短調、二短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1		年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。						
受講上の注意						
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期試験				40		
前期試験				40		
主体的な授業参加				20		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント配布					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	ホ短調、ニ短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	岡本 時子、河合 摂子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。					
授業概要					
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。					
受講上の注意					
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
後期試験			40		
前期試験			40		
主体的な授業参加			20		
教科書情報					
教科書1	適宜プリント配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	ホ短調、ニ短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1		年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	田中 伴子、河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。						
受講上の注意						
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜する必要がある。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期試験				40		
前期試験				40		
主体的な授業参加				20		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント配布					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	ホ短調、ニ短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1		年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	川喜多 史子、河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。						
受講上の注意						
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期試験				40		
前期試験				40		
主体的な授業参加				20		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント配布					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	木短調にて
11	へ長調にて
12	二短調にて
13	木短調、二短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1		年次	0	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	田坂 千禎、河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声 体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとる など、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。						
受講上の注意						
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音) を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また 授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜する必要がある。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期試験				40		
前期試験				40		
主体的な授業参加				20		
教科書情報						
教科書1	適宜プリント配布					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。		
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明		
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)		
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)		
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調		
6	近親調の学習 4度5度音程。		
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子		
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始		
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練		

10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	ホ短調、ニ短調にて
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27 週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ2		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	田中 伴子、河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェー ジュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、や や複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声 体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高 度な能力を養うため学習範囲を広げる。						
受講上の注意						
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェー ジュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を 持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法 やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他 の調でも復習することが重要である。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
主体的な授業参加				20		
前期試験				40		
後期試験				40		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28 週まで)		
2	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)		
3	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
4	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
5	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		

6	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱

25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	川喜多 史子、河合 摂子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェー ジュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、や や複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。						
授業概要						
対面授業 ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声 体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高 度な能力を養うため学習範囲を広げる。						
受講上の注意						
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェー ジュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を 持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法 やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他 の調でも復習することが重要である。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
主体的な授業参加				20		
前期試験				40		
後期試験				40		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28 週まで)		
2	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)		
3	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
4	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
5	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		

6	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱

25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	田坂 千禎、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標

ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェー|ジュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。|ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、や|や複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。|

授業概要

対面授業|ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声|体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高|度な能力を養うため学習範囲を広げる。|

受講上の注意

継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェー|ジュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を|持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法|やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他|の調でも復習することが重要である。|

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書情報

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28 週まで)		
2	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)		
3	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
4	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
5	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		

6	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱

25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	岡本 時子、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標

ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェー|ジュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。|ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、や|や複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。|

授業概要

対面授業|ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声|体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高|度な能力を養うため学習範囲を広げる。|

受講上の注意

継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェー|ジュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を|持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法|やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他|の調でも復習することが重要である。|

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書情報

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28 週まで)		
2	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)		
3	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
4	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		
5	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音		

6	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# ♭ 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱

25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	日本音楽の歴史と理論	年次	0	単位数	4
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	講義		
教員名	出口 実紀				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本音楽について、まずは「知る」ことから始める。授業を通じて日本音楽の各種目についての基礎知識を学ぶとともに、歴史や文化的背景も含めて音楽の特徴を理解する。

授業概要

対面授業|日本音楽の中の主要な種目(雅楽、声明、琵琶楽、能、文楽、歌舞伎、地歌、箏曲、尺八など)をとりあげ、配布資料や視聴覚教材を使用して授業をおこなう。必要に応じて実際に楽器を使用し、音色や構造についても講義する。

受講上の注意

学習期間中、日本音楽や和楽器に興味、関心を持ち、機会があれば実際に鑑賞するのが望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
平常点(授業態度や取り組み姿勢)	30
授業内小レポート	30
学期末試験またはレポート	40

教科書情報

教科書1	授業内でプリントを配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1	『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』
-------	------------------------

出版社名	東京堂出版	著者名	月溪恒子
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
出席が全体の3分の2に満たない場合は不可とします。 また授業では視聴覚教材を使用するため、授業中の私語は厳禁。騒がしい場合には退出してもらいます。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	ガイダンス		
2	日本音楽の概論		
3	日本音楽の時代区分と種目		
4	雅楽		
5	雅楽		
6	雅楽		
7	声明		
8	声明		
9	琵琶楽		
10	琵琶楽		
11	能・狂言		

12	能・狂言
13	人形浄瑠璃
14	人形浄瑠璃
15	前期授業のまとめ 試験またはレポート
16	歌舞伎
17	歌舞伎
18	地歌(三味線音楽)
19	地歌(三味線音楽)
20	箏曲
21	箏曲
22	尺八
23	近・現代の音楽
24	近・現代の音楽
25	アイヌの音楽
26	沖縄の音楽
27	沖縄の音楽
28	民俗音楽
29	民俗音楽
30	前期授業のまとめ 試験またはレポート

科目名	ピアノ1		年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)		
教員名	今川 裕代、高久 理恵、熊本 マリ、仲道 祐子、田中 伴子、川喜多 史子、中村 佳世子、笠原 純子、片山 優陽、木田 志津加、黒瀬 紀久子、中村 勝樹、秋山 裕子、三木 康子、山崎 葉子、山下 泰夫、河合 摂子、深井 千聡、小林 かずみ、田中 正也、島本 淳子、多川 響子、遠藤 玲子、阪本 久美、岡田 陽子、阪本 朋子、山田 真由美、辻川 謙次					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自の専攻する器楽や声楽の演奏の向上の助けとなることを目的とする。 また必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。						
授業概要						
対面授業 週1回 20 分の個人レッスン。 1年次前期は経験者、初心者に係わらずピアノ演奏の基礎から指導する。 それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の習得を目指す。 基礎をしっかり身に付ける事を重要視し、前期試験は行わず後期試験(自由曲)でその成果を見る。						
受講上の注意						
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語など、事前に調べておくこと。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
後期実技試験				100		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						

出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
レッスン受講回数が 20 回に満たない場合は単位認定できない。 教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2 年次~3 年次)に、合格しなくてはならない。					
教員実務経験					
教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	進度の見極めと前期課題の決定				
2	個人の進度に合わせたレッスン1				
3	個人の進度に合わせたレッスン2				
4	個人の進度に合わせたレッスン3				
5	個人の進度に合わせたレッスン4				
6	個人の進度に合わせたレッスン5				
7	個人の進度に合わせたレッスン6				

8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	個人の進度に合わせたレッスン14 後期課題の提案
16	後期課題の決定 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	ピアノ2		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)		
教員名	今川 裕代、高久 理恵、熊本 マリ、仲道 祐子、田中 伴子、川喜多 史子、中村 佳世子、笠原 純子、片山 優陽、木田 志津加、黒瀬 紀久子、中村 勝樹、秋山 裕子、三木 康子、山崎 葉子、山下 泰夫、河合 摂子、深井 千聡、小林 かずみ、田中 正也、島本 淳子、多川 響子、遠藤 玲子、阪本 久美、岡田 陽子、阪本 朋子、山田 真由美、辻川 謙次					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自が専攻するコースの、専門科目の理解の助けとなることを目的とする。 また必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。						
授業概要						
対面授業 週1回 20 分の個人レッスン。 1年次で学んだ事を更に深く学習する。それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の更なる習得を目指す。前期試験(自由曲)、後期試験(自由曲)でその成果を見る。						
受講上の注意						
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語などは事前に調べておくこと。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
前期・後期実技試験				100		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						

出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
レッスン受講回数が 20 回に満たない場合は単位認定できない。 教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2 年次~3 年次)に、合格しなくてはならない。					
教員実務経験					
教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期課題の決定 教職課程を履修している学生に対しては、教職認定試験の課題曲も決定する				
2	個人の進度に合わせたレッスン1				
3	個人の進度に合わせたレッスン2				
4	個人の進度に合わせたレッスン3				
5	個人の進度に合わせたレッスン4				
6	個人の進度に合わせたレッスン5				
7	個人の進度に合わせたレッスン6				

8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定及び教職認定試験の受験が必要な学生に対しては受験曲の確認 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	ピアノ3		年次	3	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)		
教員名	今川 裕代、高久 理恵、熊本 マリ、仲道 祐子、田中 伴子、川喜多 史子、中村 佳世子、笠原 純子、片山 優陽、木田 志津加、黒瀬 紀久子、中村 勝樹、秋山 裕子、三木 康子、山崎 葉子、山下 泰夫、河合 摂子、深井 千聡、小林 かずみ、田中 正也、島本 淳子、多川 響子、遠藤 玲子、阪本 久美、岡田 陽子、阪本 朋子、山田 真由美、辻川 謙次					
クラス名						
授業目的と到達目標						
音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自が専攻するコースの、専門科目の理解の助けとなることを目的とする。 また必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。						
授業概要						
対面授業 週1回 20 分の個人レッスン。 1・2年次で学んだ事を更に深く学習する。それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の更なる習得を目指す。前期試験(自由曲)、後期試験(自由曲)でその成果を見る。						
受講上の注意						
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語などは事前に調べておくこと。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
前期・後期実技試験				100		
教科書情報						
教科書1						
出版社名			著者名			
教科書2						
出版社名			著者名			
教科書3						

出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
レッスン受講回数が 20 回に満たない場合は単位認定できない。 教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2 年次~3 年次)に、合格しなくてはならない。			
教員実務経験			
教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	前期課題の決定及び教職認定試験の受験が必要な学生に対しては受験曲の確認		
2	個人の進度に合わせたレッスン1		
3	個人の進度に合わせたレッスン2		
4	個人の進度に合わせたレッスン3		
5	個人の進度に合わせたレッスン4		
6	個人の進度に合わせたレッスン5		
7	個人の進度に合わせたレッスン6		

8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定及び個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	ピアノ実技3		年次	3	単位数	6
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	レッスン(代表採点)		
教員名	今川 裕代、高久 理恵、熊本 マリ、仲道 祐子、田中 伴子、川喜多 史子、中村 佳世子、 笠原 純子、片山 優陽、木田 志津加、黒瀬 紀久子、中村 勝樹、秋山 裕子、三木 康子、 山崎 葉子、山下 泰夫、河合 摂子、深井 千聡、小林 かずみ、田中 正也、島本 淳子、多 川 響子、遠藤 玲子、阪本 久美、岡田 陽子、阪本 朋子、山田 真由美、辻川 謙次					
クラス名						
授業目的と到達目標						
ピアノを専攻する学生の為のレッスンで、個々の音楽的感覚の向上を目指す。ピアノ演奏のテクニックを極め、ピ アノによる表現能力の幅を広げることを目的とする。 演奏技術の基礎をしっかりと習得し、楽譜を正確に読み取っ た上で、各々の感性を表現できるようになることを目標とする。						
授業概要						
対面授業 週1回 60 分の個人レッスン。 前期課題:エチュード(任意)・J.S.バッハ(平均律Ⅰ・Ⅱ 巻より前奏曲と フーガ)・ベートーヴェンのソナタ 後期課題:エチュード(任意)・J.S.バッハ(平均律Ⅰ・Ⅱ 巻より前奏曲とフーガ又 はイギリス組曲よりプレリュード)・ 自由曲 それぞれの課題を通してフレーズ、音色、様式 などについて一週毎に内容を深め表現に必要な技術を身につけていく。						
受講上の注意						
毎日の練習を欠かさないこと。 各自の課題に関する必要な知識を得ておくこと。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
前期・後期実技試験				100		
教科書情報						
教科書1						
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
レッスン受講回数が 20 回に達していない場合は単位認定出来ない。 教職課程を履修する学生は、2 年次~3 年次に実施される教職認定テストに合格しなければならない。 前期後期の課題曲の詳細については、課題曲表を確認すること。			
教員実務経験			
教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	前期課題の決定及び教職認定試験の受験が必要な学生に対しては受験曲の確認		
2	個人の進度に合わせたレッスン1		
3	個人の進度に合わせたレッスン2		
4	個人の進度に合わせたレッスン3		
5	個人の進度に合わせたレッスン4		

6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期課題に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定及び個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					
授業目的と到達目標					
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。					
授業概要					
対面授業 授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。 基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。 コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。 遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。					
受講上の注意					
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			70		
合同演奏会			30		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。			
教員実務経験			
邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。		
2	練習曲・松の緑		
3	練習曲・松の緑		
4	練習曲・松の緑		
5	練習曲・松の緑		
6	練習曲・松の緑		
7	練習曲・松の緑		
8	練習曲・松の緑		
9	練習曲・松の緑		
10	練習曲・松の緑		
11	松の緑・末広狩		

12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶
27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					
授業目的と到達目標					
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。					
授業概要					
対面授業 授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。 基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。 コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。 遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。					
受講上の注意					
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			70		
合同演奏会			30		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。			
教員実務経験			
邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。		
2	練習曲・松の緑		
3	練習曲・松の緑		
4	練習曲・松の緑		
5	練習曲・松の緑		
6	練習曲・松の緑		
7	練習曲・松の緑		
8	練習曲・松の緑		
9	練習曲・松の緑		
10	練習曲・松の緑		
11	松の緑・末広狩		

12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶
27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					
授業目的と到達目標					
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。					
授業概要					
対面授業 授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。 基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。 コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。 遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。					
受講上の注意					
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			70		
合同演奏会			30		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。			
教員実務経験			
邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。		
2	練習曲・松の緑		
3	練習曲・松の緑		
4	練習曲・松の緑		
5	練習曲・松の緑		
6	練習曲・松の緑		
7	練習曲・松の緑		
8	練習曲・松の緑		
9	練習曲・松の緑		
10	練習曲・松の緑		
11	松の緑・末広狩		

12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶
27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					
授業目的と到達目標					
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。					
授業概要					
対面授業 授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。 基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。 コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。 遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。					
受講上の注意					
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			70		
合同演奏会			30		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。			
教員実務経験			
邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。		
2	練習曲・松の緑		
3	練習曲・松の緑		
4	練習曲・松の緑		
5	練習曲・松の緑		
6	練習曲・松の緑		
7	練習曲・松の緑		
8	練習曲・松の緑		
9	練習曲・松の緑		
10	練習曲・松の緑		
11	松の緑・末広狩		

12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶
27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長由利				
クラス名					

授業目的と到達目標

洋楽で育ってきた演奏楽科の学生には、日本人である以上最低限の邦楽を理解していただきたい。長唄三味線は邦楽の中でも日本を代表する音楽だ。音楽大学に入った学生ならば、三味線位は常識として体験しておくべきではないかと考える。長唄入門曲の代表格「松の緑」「末広がり」を履修することが最大の目的であり、到達点でもある。

授業概要

【対面】「松の緑」「末広がり」の履修は言うに及ばず、三味線の歴史、江戸文化、曲の背景、歌詞の意味など、知識として知っておくべき事柄等もあわせて講義する。

受講上の注意

三味線の場合、初心者が一人で予習するというのはとても難しい。復習ならば少しは可能なので、楽器を借り出して是非ともやって欲しい。楽器は種類に限らず、とにかく馴れることが上達のポイントとなるからだ。レッスンは段階を経てステップアップするようプログラムを組んでおり、グループレッスン形式を取る。クラス全員が同じレベルで進行することが学習効率上望ましいゆえ、この講座を選択したならば極力出席していただくようお願いしたい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
演奏会(試験の代わり)	30
曲の上達度	50
授業態度	19

教科書情報

教科書1	こちらで用意したものをプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	三味線についての説明。持ち方、弾き方の説明及び練習曲の実習		
2	練習曲		
3	練習曲の続き		
4	練習曲の続き		
5	練習曲の続き		
6	練習曲の続き		
7	練習曲の続き		
8	練習曲の続き		

9	練習曲の続き
10	練習曲の続き
11	「松の緑」の解説及び実習
12	「松の緑」の続き
13	「松の緑」の続き
14	「松の緑」の続き
15	「松の緑」の続き
16	「松の緑」の続き
17	「松の緑」の続き
18	「末広がり」の解説及び実習
19	「末広がり」の続き
20	「末広がり」の続き
21	「末広がり」の続き
22	「末広がり」の続き
23	「末広がり」の続き
24	「末広がり」の続き
25	「松の緑」「末広がり」の復讐
26	「松の緑」「末広がり」の復讐
27	「松の緑」「末広がり」の復讐
28	「松の緑」「末広がり」の復讐
29	「松の緑」「末広がり」の復讐
30	「松の緑」「末広がり」の復讐

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長由利				
クラス名					

授業目的と到達目標

洋楽で育ってきた演奏楽科の学生には、日本人である以上最低限の邦楽を理解していただきたい。長唄三味線は邦楽の中でも日本を代表する音楽だ。音楽大学に入った学生ならば、三味線位は常識として体験しておくべきではないかと考える。長唄入門曲の代表格「松の緑」「末広がり」を履修することが最大の目的であり、到達点でもある。

授業概要

【対面】「松の緑」「末広がり」の履修は言うに及ばず、三味線の歴史、江戸文化、曲の背景、歌詞の意味など、知識として知っておくべき事柄等もあわせて講義する。

受講上の注意

三味線の場合、初心者が一人で予習するというのはとても難しい。復習ならば少しは可能なので、楽器を借り出して是非ともやって欲しい。楽器は種類に限らず、とにかく馴れることが上達のポイントとなるからだ。レッスンは段階を経てステップアップするようプログラムを組んでおり、グループレッスン形式を取る。クラス全員が同じレベルで進行することが学習効率上望ましいゆえ、この講座を選択したならば極力出席していただくようお願いしたい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
演奏会(試験の代わり)	30
曲の上達度	50
授業態度	19

教科書情報

教科書1	こちらで用意したものをプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	三味線についての説明。持ち方、弾き方の説明及び練習曲の実習		
2	練習曲		
3	練習曲の続き		
4	練習曲の続き		
5	練習曲の続き		
6	練習曲の続き		
7	練習曲の続き		
8	練習曲の続き		

9	練習曲の続き
10	練習曲の続き
11	「松の緑」の解説及び実習
12	「松の緑」の続き
13	「松の緑」の続き
14	「松の緑」の続き
15	「松の緑」の続き
16	「松の緑」の続き
17	「松の緑」の続き
18	「末広がり」の解説及び実習
19	「末広がり」の続き
20	「末広がり」の続き
21	「末広がり」の続き
22	「末広がり」の続き
23	「末広がり」の続き
24	「末広がり」の続き
25	「松の緑」「末広がり」の復讐
26	「松の緑」「末広がり」の復讐
27	「松の緑」「末広がり」の復讐
28	「松の緑」「末広がり」の復讐
29	「松の緑」「末広がり」の復讐
30	「松の緑」「末広がり」の復讐

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長由利				
クラス名					

授業目的と到達目標

洋楽で育ってきた演奏楽科の学生には、日本人である以上最低限の邦楽を理解していただきたい。長唄三味線は邦楽の中でも日本を代表する音楽だ。音楽大学に入った学生ならば、三味線位は常識として体験しておくべきではないかと考える。長唄入門曲の代表格「松の緑」「末広がり」を履修することが最大の目的であり、到達点でもある。

授業概要

【対面】「松の緑」「末広がり」の履修は言うに及ばず、三味線の歴史、江戸文化、曲の背景、歌詞の意味など、知識として知っておくべき事柄等もあわせて講義する。

受講上の注意

三味線の場合、初心者が一人で予習するというのはとても難しい。復習ならば少しは可能なので、楽器を借り出して是非ともやって欲しい。楽器は種類に限らず、とにかく馴れることが上達のポイントとなるからだ。レッスンは段階を経てステップアップするようプログラムを組んでおり、グループレッスン形式を取る。クラス全員が同じレベルで進行することが学習効率上望ましいゆえ、この講座を選択したならば極力出席していただくようお願いしたい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
演奏会(試験の代わり)	30
曲の上達度	50
授業態度	19

教科書情報

教科書1	こちらで用意したものをプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	三味線についての説明。持ち方、弾き方の説明及び練習曲の実習		
2	練習曲		
3	練習曲の続き		
4	練習曲の続き		
5	練習曲の続き		
6	練習曲の続き		
7	練習曲の続き		
8	練習曲の続き		

9	練習曲の続き
10	練習曲の続き
11	「松の緑」の解説及び実習
12	「松の緑」の続き
13	「松の緑」の続き
14	「松の緑」の続き
15	「松の緑」の続き
16	「松の緑」の続き
17	「松の緑」の続き
18	「末広がり」の解説及び実習
19	「末広がり」の続き
20	「末広がり」の続き
21	「末広がり」の続き
22	「末広がり」の続き
23	「末広がり」の続き
24	「末広がり」の続き
25	「松の緑」「末広がり」の復讐
26	「松の緑」「末広がり」の復讐
27	「松の緑」「末広がり」の復讐
28	「松の緑」「末広がり」の復讐
29	「松の緑」「末広がり」の復讐
30	「松の緑」「末広がり」の復讐

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標

1. 箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏に關しての教員採用試験に對應出来る程度の理解を目標とする。| 2. 箏を通じて日本の伝統樂器の良さや音色を体験し、学校教育の場で和|樂器を使った授業が出来ることを目標とする。

授業概要

対面授業|前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な|演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使つての正確な調絃での演奏をす|る。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会|では合奏を試みる。小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出|来るよう指導する。舞台・テレビ・ラジオ等での演奏家としての表現力|を、段階に応じて習得させる。

受講上の注意

前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期受講や演奏への取り組み姿勢	50
後期受講や演奏会への取り組み姿勢	50

教科書情報

教科書1	「箏入門の為の小品集」吉崎克彦著		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
2	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
3	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
4	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
5	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		

6	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
7	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
8	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
9	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
10	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
11	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
12	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
13	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
14	対面授業 箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
15	対面授業 前期のまとめと試験
16	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
17	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
18	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
19	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
20	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
21	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
22	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
23	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
24	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
25	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
26	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
27	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ

28	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
29	対面授業 演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
30	対面授業 後期のまとめ

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標

1. 箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏に關しての教員採用試験に對應出来る程度の理解を目標とする。| 2. 箏を通じて日本の伝統樂器の良さや音色を体験し、学校教育の場で和|樂器を使った授業が出来ることを目標とする。

授業概要

対面授業|前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な|演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使つての正確な調絃での演奏をす|る。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会|では合奏を試みる。小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出|来るよう指導する。舞台・テレビ・ラジオ等での演奏家としての表現力|を、段階に応じて習得させる。

受講上の注意

前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期受講や演奏への取り組み姿勢	50
後期受講や演奏会への取り組み姿勢	50

教科書情報

教科書1	「箏入門の為の小品集」吉崎克彦著		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
2	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
3	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
4	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
5	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		

6	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
7	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
8	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
9	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
10	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な奏法を学ぶ
11	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
12	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
13	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
14	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
15	前期のまとめと試験
16	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
17	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
18	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
19	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
20	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
21	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
22	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
23	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
24	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
25	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
26	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
27	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ

28	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
29	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
30	後期のまとめ

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標

1. 箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏に關しての教員採用試験に對応出来る程度の理解を目標とする。| 2. 箏を通じて日本の伝統樂器の良さや音色を体験し、学校教育の場で和|樂器を使った授業が出来ることを目標とする。

授業概要

対面授業|前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な|演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使つての正確な調絃での演奏をす|る。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会|では合奏を試みる。小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出|来るよう指導する。舞台・テレビ・ラジオ等での演奏家としての表現力|を、段階に応じて習得させる。

受講上の注意

前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期受講や演奏への取り組み姿勢	50
後期受講や演奏会への取り組み姿勢	50

教科書情報

教科書1	「箏入門の為の小品集」吉崎克彦著		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
2	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
3	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
4	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		
5	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ		

6	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
7	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
8	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
9	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
10	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な奏法を学ぶ
11	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
12	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
13	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
14	箏の基礎知識を学び、奏法についてはテキストを用いて箏爪のあて方などの基礎から始め様々な記譜法や奏法を学ぶ
15	前期のまとめと試験
16	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
17	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
18	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
19	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
20	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
21	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
22	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
23	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
24	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
25	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
26	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
27	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ

28	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
29	演奏会に向けての曲をすすめ、パート練習の後、合奏について学ぶ
30	後期のまとめ

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長由利				
クラス名					

授業目的と到達目標

洋楽で育ってきた演奏楽科の学生には、日本人である以上最低限の邦楽を理解していただきたい。長唄三味線は邦楽の中でも日本を代表する音楽だ。音楽大学に入った学生ならば、三味線位は常識として体験しておくべきではないかと考える。長唄入門曲の代表格「松の緑」「末広がり」を履修することが最大の目的であり、到達点でもある。

授業概要

【対面】「松の緑」「末広がり」の履修は言うに及ばず、三味線の歴史、江戸文化、曲の背景、歌詞の意味など、知識として知っておくべき事柄等もあわせて講義する。

受講上の注意

三味線の場合、初心者が一人で予習するというのはとても難しい。復習ならば少しは可能なので、楽器を借り出して是非ともやって欲しい。楽器は種類に限らず、とにかく馴れることが上達のポイントとなるからだ。レッスンは段階を経てステップアップするようプログラムを組んでおり、グループレッスン形式を取る。クラス全員が同じレベルで進行することが学習効率上望ましいゆえ、この講座を選択したならば極力出席していただくようお願いしたい。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
演奏会(試験の代わり)	30
曲の上達度	50
授業態度	19

教科書情報

教科書1	こちらで用意したものをプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	

教科書3			
出版社名		著者名	
参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	三味線についての説明。持ち方、弾き方の説明及び練習曲の実習		
2	練習曲		
3	練習曲の続き		
4	練習曲の続き		
5	練習曲の続き		
6	練習曲の続き		
7	練習曲の続き		
8	練習曲の続き		

9	練習曲の続き
10	練習曲の続き
11	「松の緑」の解説及び実習
12	「松の緑」の続き
13	「松の緑」の続き
14	「松の緑」の続き
15	「松の緑」の続き
16	「松の緑」の続き
17	「松の緑」の続き
18	「末広がり」の解説及び実習
19	「末広がり」の続き
20	「末広がり」の続き
21	「末広がり」の続き
22	「末広がり」の続き
23	「末広がり」の続き
24	「末広がり」の続き
25	「松の緑」「末広がり」の復讐
26	「松の緑」「末広がり」の復讐
27	「松の緑」「末広がり」の復讐
28	「松の緑」「末広がり」の復讐
29	「松の緑」「末広がり」の復讐
30	「松の緑」「末広がり」の復讐

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	実習	
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					
授業目的と到達目標					
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。					
授業概要					
対面授業 まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。					
受講上の注意					
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業、演奏会への取り組み			80		
実技試験			20		
教科書情報					
教科書1	授業内でプリントを配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
琴古流尺八演奏家			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について		
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ		
3	楽譜の読み方を学ぶ		
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ		
5	息の使い方や音の出し方を練習する		
6	乙音の練習		
7	引き続き乙音を練習する		
8	乙音を使って簡単な曲を練習する		
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する		
10	甲音の練習		
11	引き続き甲音を練習する		
12	甲音を使って簡単な曲を練習する		

13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う
28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	実習	
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					
授業目的と到達目標					
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。					
授業概要					
対面授業 まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。					
受講上の注意					
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業、演奏会への取り組み			80		
実技試験			20		
教科書情報					
教科書1	授業内でプリントを配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
琴古流尺八演奏家			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について		
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ		
3	楽譜の読み方を学ぶ		
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ		
5	息の使い方や音の出し方を練習する		
6	乙音の練習		
7	引き続き乙音を練習する		
8	乙音を使って簡単な曲を練習する		
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する		
10	甲音の練習		
11	引き続き甲音を練習する		
12	甲音を使って簡単な曲を練習する		

13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う
28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	実習	
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					
授業目的と到達目標					
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。					
授業概要					
対面授業 まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。					
受講上の注意					
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業、演奏会への取り組み			80		
実技試験			20		
教科書情報					
教科書1	授業内でプリントを配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
琴古流尺八演奏家			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について		
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ		
3	楽譜の読み方を学ぶ		
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ		
5	息の使い方や音の出し方を練習する		
6	乙音の練習		
7	引き続き乙音を練習する		
8	乙音を使って簡単な曲を練習する		
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する		
10	甲音の練習		
11	引き続き甲音を練習する		
12	甲音を使って簡単な曲を練習する		

13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う
28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1		年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	実習		
教員名	米村 鈴笙					
クラス名						
授業目的と到達目標						
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。						
授業概要						
対面授業 まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。						
受講上の注意						
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
授業、演奏会への取り組み				80		
実技試験				20		
教科書情報						
教科書1	授業内でプリントを配布					
出版社名		著者名				
教科書2						
出版社名		著者名				
教科書3						
出版社名		著者名				
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
琴古流尺八演奏家			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について		
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ		
3	楽譜の読み方を学ぶ		
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ		
5	息の使い方や音の出し方を練習する		
6	乙音の練習		
7	引き続き乙音を練習する		
8	乙音を使って簡単な曲を練習する		
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する		
10	甲音の練習		
11	引き続き甲音を練習する		
12	甲音を使って簡単な曲を練習する		

13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 1 パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の 2 パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う
28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標

箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知る|ことの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学|校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。

授業概要

《 対面授業 》|前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、|チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。|後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。

受講上の注意

箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要があ|る為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をするこ|と。(一年間自分専用のお箏を使用します。)

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(受講姿勢、提出物等)	50

教科書情報

教科書1	箏入門の為の小品集		
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎 克彦
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
出席状態も成績の参考とする。			
教員実務経験			
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台で合奏が来るようになるまでを指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める		
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える		
3	糸に慣れるよう練習曲を進める		
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる		
5	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる		
6	簡単な合奏を試みる		
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習		
8	進度に合わせ、適宜、次の教材をすすめる		
9	進度に合わせ、適宜、次の教材学習をすすめる		

10	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習
23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標

箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知る|ことの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学|校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。

授業概要

《 対面授業 》|前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、|チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。|後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。

受講上の注意

箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要があ|る為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をするこ|と。(一年間自分専用の箏を使用)

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(授業への取り組み、提出物等)	50

教科書情報

教科書1	箏入門の為の小品集		
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎 克彦
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
出席状態も成績の参考とする。			
教員実務経験			
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台で合奏が来るようになるまでを指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める		
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える		
3	糸に慣れるよう練習曲を進める		
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる		
5	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる		
6	簡単な合奏を試みる		
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習		
8	進度に合わせ、適宜、次の教材をすすめる		
9	進度に合わせ、適宜、次の教材学習をすすめる		

10	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習
23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				
授業目的と到達目標					
箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知る ことの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学 校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。					
授業概要					
《 対面授業 》 前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、 チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。 後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。					
受講上の注意					
箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要があ る為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をするこ と。(一年間自分専用の箏を使用)					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
前期後期試験			30		
演奏会への参加			20		
平常点(授業への取り組み、提出物等)			50		
教科書情報					
教科書1	箏入門の為の小品集				
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎 克彦		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
出席状態も成績の参考とする。			
教員実務経験			
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台で合奏が来るようになるまでを指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める		
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える		
3	糸に慣れるよう練習曲を進める		
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる		
5	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる		
6	簡単な合奏を試みる		
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習		
8	進度に合わせ、適宜、次の教材をすすめる		
9	進度に合わせ、適宜、次の教材学習をすすめる		

10	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせ、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習
23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。| まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。

授業概要

対面授業|前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、|どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

受講上の注意

まじめに授業をうけ、遅刻をしない |くり返しけいこをする

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書情報

教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
今藤長十郎...長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。昨年はウィーン楽友協会で自身の公演。今年 は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公 演予定。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛け る。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK,国立劇場主催公演多数。 授業は 自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		
2	2. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		

3	3. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
4	4. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	5. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	6. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	7. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	8. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	9. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	10. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	11. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典

	曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	12. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	13. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	14. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	15. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	16. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
17	17. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
18	18. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
19	19. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
20	20. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
21	21. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
22	22. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。

23	23. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	24. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	25. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	26. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
27	27. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	28. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	29. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	30. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。| まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。

授業概要

対面授業|前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、|どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

受講上の注意

まじめに授業をうけ、遅刻をしない |くり返しけいこをする

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書情報

教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
今藤長十郎...長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。昨年はウィーン楽友協会で自身の公演。今年 は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公 演予定。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛け る。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK,国立劇場主催公演多数。 授業は 自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		
2	2. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		

3	3. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
4	4. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	5. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	6. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	7. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	8. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	9. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	10. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	11. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典

	曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	12. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	13. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	14. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	15. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	16. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
17	17. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
18	18. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
19	19. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
20	20. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
21	21. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
22	22. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。

23	23. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	24. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	25. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	26. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
27	27. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	28. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	29. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	30. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。| まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。

授業概要

対面授業|前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、|どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

受講上の注意

まじめに授業をうけ、遅刻をしない |くり返しけいこをする

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書情報

教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
今藤長十郎...長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。昨年はウィーン楽友協会で自身の公演。今年 は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公 演予定。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛け る。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK,国立劇場主催公演多数。 授業は 自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		
2	2. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。		

3	3. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
4	4. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	5. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	6. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	7. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	8. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	9. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	10. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	11. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典

	曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	12. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	13. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	14. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	15. 前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと言う事を、練習から入りながら 指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジ ション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	16. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
17	17. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
18	18. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
19	19. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
20	20. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
21	21. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。
22	22. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を 練習しながら、曲の理解を深める。

23	23. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	24. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	25. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	26. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
27	27. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	28. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	29. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	30. 後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勘処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	1	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	実習		
教員名	志村 哲				
クラス名					

授業目的と到達目標

受講生各自が将来、学校教員・種々の音楽指導者・文化活動企画／実行委員として、あるいは、作曲家・演奏家・音楽愛好家として、日本伝統文化|を深く、さらにはできるだけ広く理解しようとする意欲が持てるよう指導|する。特に、日本楽器のなかで、国際的普及が顕著であり、かつ伝統音楽|からポピュラー音楽まで、幅広く使用されている尺八について、その基礎|知識習得と実技を通して魅力を知り、その経験を諸活動に役立てられるようにする。

授業概要

「邦楽1」では、時代劇に登場する虚無僧の音楽「古典本曲」を扱い、楽|器と奏法の特徴を感得させ、独奏曲、吹き合わせ等の稽古を行なう。

受講上の注意

楽器演奏は、短時間でも毎日稽古することが、自己の能力やものの考え方|の上で、新たな発見へとつながります。洗顔や歯磨きのように、楽器を手|にしなければ落ち着かないようになるくらい習慣づけましょう。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
発表会	40
授業に取り組む姿勢	50
最終課題	10

教科書情報

教科書1	授業内で配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報			
参考書名1	『古管尺八の楽器学』		
出版社名	東京: 出版芸術社	著者名	志村哲
参考書名2	『事典 世界音楽の本』		
出版社名	東京: 岩波書店	著者名	志村哲ほか、共著
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
国際尺八フェスティバル他への招待講師・尺八演奏家であり、尺八の研究で博士(学術)取得。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	1. 尺八の歴史と楽器の種類、音楽種目の拡がりを理解する。 楽器の取り扱い方法を学ぶ。		
2	発音の原理を知り、練習方法を学ぶ。		
3	各自の問題点の確認と実技に関する指導。		
4	2. 実技指導に際しては、以下の内容を、各自の習得レベルに合わせて、毎週、繰り返し指導する。		
5	・様々な楽器尺八の取り扱い方法を学ぶ。		
6	・吹奏に際して、心身の事前準備、姿勢、呼吸法等を修得する。		
7	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を身につける。		
8	・練習曲により、音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習を行なう。		
9	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を繰り返し確認しながら身につける。 ・音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習。		

10	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を身につける。 ・音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習。
11	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
12	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
13	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
14	3. 楽曲の吹奏は、各自の習得レベルに応じて、以下の内容で、毎週、繰り返し稽古する。
15	・古典本曲の記譜法を理解する。
16	・古典本曲の記譜法を理解する。
17	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。
18	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。
19	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。
20	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
21	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
22	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
23	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
24	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
25	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
26	4. 1年間の修行の成果を発表会で吹奏し、確認する。
27	・尺八固有の運指法を簡単な楽曲の練習を通じて身につける。
28	・尺八固有の運指法を簡単な楽曲の練習を通じて身につける。
29	発表会の実施
30	一年間の復習

科目名	ポピュラー作・編曲法1		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	小野田 享子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
コード理論①の復習。 作・編曲法、即興演奏に必要な、中級理論の履修。						
授業概要						
対面授業とする。 初級コード理論①の続編、中級理論をレクチャー。 コード、スケール、ケーデンス、代理コード等のヴァリエーション。 応用&発展を中心とする。教員が作編曲家としての経験をいかし作曲編曲 演奏する上での基本的な知識を習得させる。						
受講上の注意						
各自、Text、空五線譜、筆記用具持参の事。 対面授業とする。						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
授業内小テスト。学年末小テスト				70		
平常点				30		
教科書情報						
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー					
出版社名	サーベル社		著者名	中村正史		
教科書2						
出版社名			著者名			
教科書3						
出版社名			著者名			
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	年間カリキュラム概要説明 コード理論①の復習 Part①		
2	コード理論①の復習 Part②		
3	Overtone, Low Interval Limited の復習 ポピュラー音楽で使用する、色々なスケールの復習		
4	minor-Scale Part① Natural, Harmonic, Merodic minor-Scale		
5	minor-Scale Part② Diatonic Chord /Chord Function		
6	ord Function 6 Diminish Chord の考察 Passing Diminish &Tonic Diminish		
7	Chord Tone & Non Chord Tone の復習		
8	Upper Structure Triad &Tension Note ①		
9	Upper Structure Triad &Tension Note ②		
10	Pivot Chord ①		
11	Pivot Chord ②		
12	基礎的な音響学概論		

13	ポピュラー音楽: 音楽用語・記号 ①
14	ポピュラー音楽: 音楽用語・記号 ②
15	授業のまとめとテスト
16	前期総合Exercise
17	Dead Spot Turn Back 循環&逆順のVariation
18	Avoid Note&Chord Function
19	Reharmonize 「Happy Birthday」
20	Reharmonize 「Happy Birthday」2
21	Relative Key Modulation
22	基礎的な 和声 & 対位法 概論
23	ポピュラー音楽の歴史 概論①
24	ポピュラー音楽の歴史 概論②
25	後期学習項目総括 及び、総合Exercise。
26	コード理論: 作・編曲 及び、即興演奏への応用
27	コード理論: 作・編曲 及び、即興演奏への応用2
28	学年末授業内小テスト 模擬試験 及び、解説。
29	学年末学習項目総括。及び、学年末授業内小テスト 試験
30	授業内小テスト 試験 解答と解説

科目名	ポピュラー作・編曲法1	年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期	形態	演習		
教員名	木村 知之				
クラス名					

授業目的と到達目標

和音進行を設定したうえでのメロディ付け、またメロディに対するコード付けの練習。また構成などを習得。4リズムの記譜法と編曲法

授業概要

対面授業||和音進行を設定したうえでのメロディ付け、またメロディに対するコード付けの実践。構成、4リズムによる編曲の実践

受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
平常点	30
テスト	70

教科書情報

教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書情報

参考書名1				
出版社名		著者名		

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	年間カリキュラム概要説明。様々なコード進行の紹介		
2	循環コードによるメロディ作り1		
3	循環コードによるメロディ作り2		
4	循環コードによるメロディ作り13		
5	逆循環コードによるメロディ作り1		
6	逆循環コードによるメロディ作り2		
7	逆循環コードによるメロディ作り3		
8	subdominant minor を使ったコード進行のメロディ作り1		
9	subdominant minor を使ったコード進行のメロディ作り2		
10	subdominant minor を使ったコード進行のメロディ作り3		
11	コード付けの練習1		
12	コード付けの練習2		
13	コード付けの練習3		
14	総合問題		

15	授業内テスト
16	様々な転調についての考察1
17	様々な転調についての考察2
18	様々な転調についての考察3
19	ピアノによるコードの連結1
20	ピアノによるコードの連結2
21	ピアノによるコードの連結3
22	ベースの音域と様々なベースライン1
23	ベースの音域と様々なベースライン2
24	ベースの音域と様々なベースライン3
25	ギターの音域と様々な用法1
26	ギターの音域と様々な用法2
27	ドラムの記譜法1
28	ドラムのパターンの紹介
29	総合練習
30	授業内テスト

科目名	ポピュラー作・編曲法1		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	小林 淑子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
ポピュラー音楽の 作・編曲に於いて必要となる基礎的な知識、メロディーライティング、ハーモナイズを学習。 ポピュラー音楽の様々なジャンルを学び、4Rhythm の編曲を習得する。						
授業概要						
【対面授業】 メロディーの作り方、発展の手法、またハーモナイズを学ぶ。 様々なコード進行に於いて、メロディーライン、ベースライン、コンピングなどを学ぶ。 カウンターライン、ハモリの書き方。 リハーモナイズ 様々な楽曲を分析 4Rhythm Arrange						
受講上の注意						
空の五線紙、筆記具を持参						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
授業に取り組む姿勢				30		
課題・授業内テスト				70		
教科書情報						
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー					
出版社名	サーベル社		著者名	中村正史		
教科書2						
出版社名			著者名			
教科書3						
出版社名			著者名			
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	年間カリキュラムガイダンス① 基礎的な音楽理論①		
2	年間カリキュラムガイダンス② 基礎的な音楽理論②		
3	基本的なコード進行とメロディーライン①		
4	基本的なコード進行とメロディーライン②		
5	メロディーへのハーモナイズ(Basic)①		
6	メロディーへのハーモナイズ(Basic)②		
7	コードパターンにメロディーを作成①		
8	コードパターンにメロディーを作成②		
9	既成曲のアナリーゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する①		
10	既成曲のアナリーゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する②		

11	Bass Line と Counter Melody
12	ポピュラー楽曲に於ける 1Chorus の構成について。 メロディー、ハーモニーの特色。
13	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ①
14	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ②
15	前期のまとめと復習テスト
16	4Rhythm について、楽器と記譜①
17	4Rhythm について、楽器と記譜②
18	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色①
19	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色②
20	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色③
21	Reharmonize 実習①
22	Reharmonize 実習②
23	イントロ&エンディング①
24	イントロ&エンディング②
25	アレンジのスケッチと組み立てについて
26	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ①
27	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ②
28	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)③
29	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)④
30	1 年のまとめとテスト

科目名	ポピュラー作・編曲法1		年次	2	単位数	2
授業期間	2022 年度 前期～後期		形態	演習		
教員名	小林 淑子					
クラス名						
授業目的と到達目標						
ポピュラー音楽の 作・編曲に於いて必要となる基礎的な知識、メロディーライティング、ハーモナイズを学習。 ポピュラー音楽の様々なジャンルを学び、4Rhythm の編曲を習得する。						
授業概要						
【対面授業】 メロディーの作り方、発展の手法、またハーモナイズを学ぶ。 様々なコード進行に於いて、メロディーライン、ベースライン、コンピングなどを学ぶ。 カウンターライン、ハモリの書き方。 リハーモナイズ 様々な楽曲を分析 4Rhythm Arrange						
受講上の注意						
空の五線紙、筆記具を持参						
成績評価方法・基準						
種別				割合(%)		
授業に取り組む姿勢				30		
課題・授業内テスト				70		
教科書情報						
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー					
出版社名	サーベル社		著者名	中村正史		
教科書2						
出版社名			著者名			
教科書3						
出版社名			著者名			
参考書情報						
参考書名1						

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	年間カリキュラムガイダンス① 基礎的な音楽理論①		
2	年間カリキュラムガイダンス② 基礎的な音楽理論②		
3	基本的なコード進行とメロディーライン①		
4	基本的なコード進行とメロディーライン②		
5	メロディーへのハーモナイズ(Basic)①		
6	メロディーへのハーモナイズ(Basic)②		
7	コードパターンにメロディーを作成①		
8	コードパターンにメロディーを作成②		
9	既成曲のアナリーゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する①		
10	既成曲のアナリーゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する②		

11	Bass Line と Counter Melody
12	ポピュラー楽曲に於ける 1Chorus の構成について。 メロディー、ハーモニーの特色。
13	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ①
14	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表②
15	前期のまとめと復習テスト
16	4Rhythm について、楽器と記譜①
17	4Rhythm について、楽器と記譜②
18	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色①
19	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色②
20	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色③
21	Reharmonize 実習①
22	Reharmonize 実習②
23	イントロ&エンディング①
24	イントロ&エンディング②
25	アレンジのスケッチと組み立てについて
26	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ①
27	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ②
28	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)③
29	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)④
30	1 年のまとめとテスト